

スカウティングの原点を探るシリーズ V

第1集 耳そばだてて 聴き正せ No. 6

# 新 知 故 温 続

付 先 哲 の こ と ば

大阪スカウトクラブ 編集複製  
大阪連盟資料センター 資料提供

# 続 温 故 知 新

付 先 哲 の こ と ば

はじめに

スカウティングの原点を探るシリーズ No.5 が出来ました。  
表題は、前号に続いて「続・温故知新」といたします。

今回は、昭和36年から平成元年までの間に、ボーイスカウト日本連盟より発行された指導者用雑誌「スカウティング」の、巻頭言から集めさせていただきました。

巻頭言にある数々の「ことば」には、今でも教えられる卓見が多く、先輩諸先生の足跡がよく偲ばれます。

題名の「温故知新」は、先の号と同じく「古い物事を研究し、吟味し、そこから新しい知識や見解を得ること」(廣瀬 46頁)という意味合いから、名付けました。

もちろん、私どもは決して、古いものをすべてよしと考えているものではありません。

しかし、古いものの中に、新しい時代にも生かせる優れたものがあれば、それを大切にしたいと思います。

その意味で、この本をお読み願えましたら幸いです。

今までの各号は、おかげさまで皆様から大変ご好評をいただいて編集委員一同、まことに喜んでいます。

どうぞ本号も、より以上のご好意とご厚情を賜りますよう、はじめにごあいさつを申し上げます。

平成7年7月

大阪スカウトクラブ 田村博治

# 「スカウティング」誌巻頭言集

(筆者名の無いものは、中村 知先生の原稿です)

## 何もしない「参加」は あり得ない

世間には、役員の1人として名前をつらねるだけで、1度も、役員会に出席せず、何もしないで任期を終る人が相当ある。そして、「重任をさまたげない」という会則によって、欠席のまま、またもや役員になる例が多い。

われわれスカウト仲間は、そのような悪習慣を破りたいものである。スカウティングにおいてはいつも全員参加であるのが「班制教育」の建前である。この場合の「参加」とは、なんらかの分担をもつ、と、いうことである。分担と責任をもたない参加というものはあり得ない。英語で、PARTICIPATION(参加)という言葉は、分担(PART)をもつ、と、いうことである。

みんなが、それぞれの分担をもち、みんなの総力で、協力することが民主主義である。スカウティングは、そういう運営を、少年の頃から生活を通じて身につけさせる教育である。

もし、参加ということを、正しく解釈していない者がいるなら、とくと、反省して頂きたいものである。

1960年11月号

## パスオンの重要性

故佐野常羽先生(最初の実修所長)は、よく、パスオン(Pass on)を怠るなど、いわれた。その意味は、先輩は、よく、後輩を育てて、バトンを渡せ、という教えである。

今や、昭和35年(1960年)は、昭和36年(1961年)に、バトンを渡した。新年を迎えて、この、パスオンを思うのである。

ラグビー、フットボールにおいて、ボールを、パスオンする場合、渡す者は、必ず受ける者より前の方にいなければならない。受ける者は、これは必ず後方にさがってボールを受けねばならない。これがルールであって、このルールを破れば反則となる。佐野先生は、これをいつもいわれたのである。

先輩が、ボールを持ち続けてパスオンしないならば、ゲームはおもしろく展開しない。それはいつまでたっても、昭和35年がおわらないのと同じである。

指導者道(リーダーシップ)の要諦の1つである。班長は次長を育てて、パスオンし次長は3番スカウトを、よく育てて、これにパスオンすべきである。隊長、副長みな然りである。

先輩たちよ、ボールを持ちすぎないように。後輩よ、いつでも受けつげるように。そうすれば、ゲームは、もっと、もっと、面白くなるであらう。

1961年1月号

## 自 転 と 公 転

春がきた。わが地球の温帯地方には春夏秋冬の四季が、まことに規則正しく訪れる。これは、地球が太陽の周囲を公転するからである。

地球そのものは自発活動みたいに自転している。これによって、昼と夜、そして時刻が生まれてくる。地球以外の惑星も、さだめし、そうであろう。

こうした太陽系の運動は、誠実にルールに従い、ルールを守っている。スカウト運動もまた、太陽系運動の法則と一致しなければならないのではあるまいか。

すなわち、自己研修（自転）だけがスカウティングではなく、公転して、他との協働に努め他と調和し、他を益さなければスカウティングではないと思う。国際関係というものも、そのあり方は、この、公転運動でわかるであろう。国際コースとは、公転の原理と方法を探究してそれを実行するコースである。

B-Pは永久不滅の太陽であり、光と熱と引力とを備えて、人種、国境、階級、宗教、言語、風習の差別なく万物を照している。

B-Pは永遠に世界の総長であり、われらの太陽である。

1961年3月号

常に 開拓者たれ

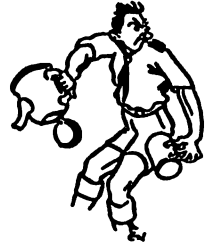
創意工夫せよ（発想の転換を図れ）

情熱を燃やせ

苦勞は 買ってでよ



（先哲のことば）



## 育 員 わ れ ら

地球から見える月は、いわゆる表面だけであってその裏面は見えない。けれども、月の実体は球形のはずである。

これと同じように、教育界でも、人々はその表面の「教員」だけを知っていて裏側の「育員」に気がつかないのか、「育員」という言葉を見たことがない。

「教」は「あるべきところ」すなわち真理を教えることがその本旨であるが、教えるだけで、あるべきところに「あらしめる」という「育」の面は、おおむね、自然にまかしているようである。これは悪くいえば「野ばなし」になりやすい。非行少年は、そこから生まれる。

われらスカウト指導者は、「育員」である！

「そだてる」ことがその役目である。日本の教育が、とかく「教」に偏重して、「教」と「育」とがアンバランスになっている今日、その任は重いといわなければならない。

りっぱな次代の後継者を、1人も、育て得なかったら、服装だけの指導者に終わってしまうであろう。それには、おのれ、まず、そだたなければならない。

1961年5月号

## 道

道のための研さん(鑽)といい、道のための精進といい、先輩のはげましの言葉の中に“道”という言葉が使われるが、案外聞き流されているのではなかろうか。

道は原始人が食糧である果実や草根、獣や魚らを得るために、山野や海辺へ行く通路にはじまって、現在の経済や生産の流通、政治力の浸透やまた、治安や防衛、文化の普及に重要な機能を果たす、人間社会の基本的通路であるが、ここでいう道は、数多くの先輩たちが苦勞して開き、築いてきたスカウト道のことである。

われわれは、先輩によって開かれ、先輩によって踏み固められたこの道を、ただ歩くだけでよいものだろうか。道のための研さん(鑽)はおろか、自分のための精進さえ満足ではないのが現状ではあるまいか。

何事によらずその深奥を究めることはむずかしい、況して、森羅万象大自然を友とするスカウト道にあってはその困難さはいうまでもない。

各自のスカウティングの向上に最善を尽くすことが第一、そして、他人のスカウティングの向上に力を貸すことができ、はじめて道のためといい得るのではあるまいか。

そして、いつの日か、輝くスカウト道の標石の礎の一つとなる、道への精進。何と困難であり誇りに満ちたものであろう。

1961年10月号

人間は 頭・心・手によって 学習する  
(ペスタロッチ)

## どこでも いつでも

「人づくり」には環境が大切であるという。そこで家庭や学校や社会がその場として叫ばれている。

けれども、ある環境によってはそれが可能であり、またある環境によっては人づくりは不可能だという考え方には再考の余地があるように思われる。動物の場合はそうであろうが、人間づくりは少しちがうと思う。そして人づくりは青少年だけの問題であって成人にはその必要はないかのごとく考え易い点にも賛成できない。

われわれは、環境のいかんを問わず、年令のいかんにかかわらず、真にその人間がりっぱな人間になろうとする決意さえ燃やすならば、いつでも、どこでも、だれでも人間はできるものと考ええる。もし、人間ができなかったら、その人の一生はゼロだと思う。

朝、起きてからの一日のすることなすことのどれにおいても、自分が自分で「人づくり」をやっていないければ人間はできない。洗面する時、食事する時、道路を歩き乗物に乗っている時、学校や勤め先での勉強や勤務のとき、そして夜、家で寝る時、それが自分の人づくりにならなかったなら、その勤務や勉強は何のためになされたのかその意味がわからない。ただ、よい成績をとるとか、仕事熱心という評判だけに終わってしまうのでは残念である。動物づくりならそれでもよかろうが……。

われわれは、Once a Scout, always a Scoutという言葉をここに再確認したい。真のスカウトは、いつでも、どこでもスカウトである。彼は悪い環境はあってもスカウトとしての人づくりに励むだろうし、その悪い環境の改善に奉仕するであろう。

環境次第で人間ができるということは正説ではあろうが、環境によらなければならない

ような人づくりでなく、根本的に自発的自主的な人づくりを提唱したい。人づくりとは、動物的でないヒューマン（人間）の形成でなくてはならない。万人から愛される人をつくることでなくてはならない。B-Pが描いた人間像は正にそれである。

1963年3月号

Membership

Followship

(協調の精神)

Friendship

(友愛の精神)

Readership

(奉仕の精神)

(こんな 訳し方もあるらしい)

「もの」の「いのち」を

大切に

「もの」とは、生き物・品物・若者  
(人間)・眼に見えないもの等 全  
ての「もの」のことである

「いのち」とは、寿命・生涯・生き  
てゆく原動力・最も大切なもの(真  
髓)等と いう意味である

## スカウティングは 深い森である

多彩な夏の行事も予定通りに実施されて風  
さわやかな新秋9月をここに迎える。

この夏、空路はるかにギリシャに使いして  
世界ジャンボリーに列し、B-Pの説いた国  
家的でもあり国際的でもあり世界的でもある  
スカウティングを切実に学んだ者もあるし、  
一介の少年の身になって実修所に入所した人  
もいるし、隊の訓練や県大会で汗を流して少  
年たちに奉仕したものもある。みな、それぞ  
れに、全力を尽し、この運動への忠誠に励ま  
れたことは、まことに欣快にたえない。

けれども、よく考えてみると、われわれ  
は、やればやるほど、スカウティングの奥行  
の深いことに気がつく。もうこれで森を抜け  
た——ということはありません。そして前人  
未踏の境地が無尽にあるように思う。一生を  
かけても探究しきれないと言え考えられる。

そう考えると、10年ぐらい隊長をつとめて  
も、実修所の1.2コースぐらいを修了して  
も、ウッドバッジをもらっても、それはほん  
の初歩というか入門というか、この深い森  
の、まだ入口でしかないのだということを自  
省してみる必要がある。ジャンボリー参加  
も一つのスカウト経歴にはちがいないが、そ  
れも修行がたらないから海外へ学びに行った  
ことを思い出したら、かつてあったような天  
狗は出ないだろう。

すべてはスタートであって終点ではないこ  
とを、とくに確認すべきであろう。

せっかく、この、すばらしい森にはいる仲  
間の1人になりながら、はいるとすぐ森の天  
狗になってしまっていて、その後の進歩がとまっ  
てしまうようではハナはだ申しわけないので  
はあるまいか。

1963年9月号

## ア ウ テ ィ ン グ

スカウティング (SCOUTING) の $\frac{3}{4}$ 、すなわち $\frac{3}{4}$ はアウトイング (OUTING) (戸外活動) だといわれる。まことに、うまいことばである。

今や、秋の季節、このうえもない絶好のシーズンである。カブたちはピクニック (野狩り) に笑顔をはころばせ、少年スカウトは追跡や忍び寄りや、ワイドゲームに夢中になるだろう。

近頃の指導者は、昔とくらべて野外活動がやりにくくなったことは事実である。近くによいキャンプ地はないし、ハイキングコースも郊外の相当はなれた地点まで出かけなければ得られない。場所の選定をあやまるならば、時として、心ない人たちのふるまいによって折角の環境をけがされ、逆効果のうき目さえまぬがれないとき。

このような状況だからアウトイングは控え目にした方がよい——と、もしも考える指導者があったとしたら、それはアウトだ。われわれは、困難を打開し、勇気をもって活路を拓かなければならない。活路をひらくことがアウトイングではなからうか？

山は招き、野はほほえむ。モズは啼き空は澄んでいる。大自然がそこにある。

アウトイングを忘れたら、もう、パイオニアではない。



1963年10月号

## 人づくりは だれがするか？

「人づくり」ということばの流行につづいて、人づくりは、だれがするのか？ という論戦が各所でおこなわれている。

それはまず家庭の責任だといいきる者がいる。学校にも責任がある——今の学校は受験準備にあけくれして人間をつくっていない——それで道徳教育をすべきだという者もいる。いやそれは社会全体の責任だ。不良書物がいけない。ラジオやテレビの影響も大きいぞ、映画だってそうだ、と論じる者もいる。深夜喫茶を禁止しろ……などと責任のなすりあいのようなものもある。われわれは、スカウティングがいちばん、人づくりのよい道だと思っているのだが……。とにかく、人づくりに大きな使命を感じ、それに努力しているなら、だれがしてもよいわけである。口さきばかりのムード合戦では空論におわる。

いかにも、人間が人をつくれないことはない。しかし、人間は往々にして便宜のために人づくりをしたがる。新興国やあるイデオロギーの国では、国が人づくりをしている。また近頃、企業体が産学合一とかいって企業体の中に学校や大学を設ける傾向がみえる。これは企業を伸ばすための人づくりである。それも受ける本人が得心しているなら問題はないかもしれない。

けれども、本当の人づくりは、自分が自分ですべきものである。自発活動によるべきである。他人に作ってもらったり、作られたりするものではあるまい。自分の自主性や基本的人権を犯されてまで、あるいは犯してまですべきものではないはずである。



## ル ッ ク ワ イ ド

さらに、われわれは、人をつくるのは人間だ——という点にいささか疑問をもつのである。そして人間にまさる力——うそをいわない、便宜のために人をつくらない力が、われわれの身近かにいつもあることを忘れていたのである。その力は永遠不滅である。シャカもキリストもマホメットも、この力によって偉大となった。古今幾多の名僧知識もこの力によって自分の人づくりをした。わが、B-Pもそうだった！

この偉大な力とは何か？ いわく、それは「大自然」である！ 芭蕉も西行も大自然の力にふれるために旅をした。スカウティングもまたこの道を行く。

B-Pは、「大自然」という東洋風のいいかたを、「ジャングル」といいかえたと思う。そしてウッドクラフトというものを「人づくり」の方法だと説いた。

この意味で、スカウト野営やスカウトハイキングをよく考えてみたいものである。

1964年3月号



語る人 尊とし、  
 語ることも知らないで  
 体で語る人、さらに尊とし。  
 導く事 尊とし、  
 導くことも知らないで  
 後ろ姿で導く人、さらに尊とし。

シニアスカウトの標語として英国では“Look Wide”ということばをあげている。広く見よ……とか、視野を広くせよ……とかいう意味だとうけとられる。けれども、それは単に、かけ声だけにとどまらないことに気づく。

それは——スカウティングは、国内だけでなく、広く世界的にひろがった運動であるから、カブからローバーに至る課程（あるいは過程）のなかの、シニアの段階で、World Scoutingについての勉強をすべきだという意味をこめていと解すのである。

この勉強のお手本は、B-P自身が身をもって示した。その年譜を一覧しただけでも1910年から1938年に至る28年間に、20回の海外旅行をしているのである。そしてそれは彼の力だめしであった。

自分の隊、自分の県、自分の国のスカウティングにだけ力を尽くし、思いをよせていればそれでよいというような、狭い心ではスカウティングの真の大きな姿を発見できないだろう。世界的な市民にはなれない。

われらは、わが国に欠けている広域スカウティングをもりあげねばならない。それは、今後の日本のシニアスカウティングのあり方のいかんにかかっているのではなからうか？

1964年5月号



## 風

## 格

## 川

「萬葉集」の1042に、天平16(744)年正月11日、市原王が大伴家持と活道(いけ)岡に登った時に詠んだ一首として、

一つ松 幾代か歴(へ)ぬる 吹く風の  
声の 清(す)めるは 年 深みかも  
というのがある。

吹く風は、若木老木の別なく平等に吹いてゆくのだが、その風にそよいで、それらの木の枝や葉がかなでる音は一樣ではない。あるものは軽薄な音を発し、あるものは自己宣伝の声を出し、あるものは素直でない音を出す。不和雷同の叫びもあろう。これは音としては雑音である。

たまたま、岡に登ったとき、心耳を洗うような、清く澄んだ松籟(しょうらい)をきいた。はっ、として見あげれば、それは、年を経た1本の老松である。幾十年の風雪に耐えたのかしらないが、それは磨きのかかった、そして長い年月、丹念に吹きこんだ楽器のようである——と、作者は、このような感動を詠んだものと思われる。

年輪をかさねたスカウターも、この老松のようにありたいものである。

これぞ、風格というものか！

1964年6月号

若木の美しさは 育ちゆく強さにある  
老樹の美しさは 風雪に耐えた  
歴史にある

どんな川もその初めは水源がある。水源はポタリ、ポタリと落ちてくる水滴の、数多くが集まってできる。それが細流となる。細流のいくつかが合し、仲よく溪流となる。水は岩をのりこえ、元気よくおどってたのしい歌をかなでる。それはカビングのようだ。

溪流は、どんどん下って里に出る。川幅は10メートルから50メートルとなる。流速は早い。前途洋々という感じがする。ボーイスカウトのようだ。ここで水は大小の岩や石とたわむれ、たれさがった樹の枝をはじいたり、魚どもを養ったりする。まだ濁らない。

大きな瀬にあたる。そしてだんだん平野を流れるがその頃には左からも右からも汚水がそそぎこみ、さまざまな人間どもの様相をうつす。工場が見え、鉄橋がまたぎ、初めて文明とか社会のにおいがする。いまや川はシニアスカウトの課程にある。時に船を流れにのせて運んでやる。材木を流してやる。奉仕である。しかし、川幅はだんだん広くなる。そして、将来遠い外国に行きたいと思う。いろいろな毒水もそそぎこむ。そのため身をほろぼす仲間もいる。まもなく河口近し。水は、かえりみてヨハン・シュトラウス作曲のメロディーを口ずさむだろう。

おう、ついに海に出た！ はて知れぬ大洋に流れこむ。もう夢の世界ではない。ここで初めて潮の干満というものにさらされる。岸にぶっつけられたり、深い海底にひきこまれたりして、いったいどこへ行くのか予測できない。まさに、これはローバーリングである。文字どおり塩からくなった自分におどろく。晴れた朝のなんと美しいことよ！ されど嵐の夜はまことにけわしい。大きな外航船をうかせてやるときは、その船といっしょに、まだ見知らぬ外国に行けるような気がす

る。砂浜に、たまに帰ってくるが、そのとき、かわいい坊やたちは、私のなかに足をひたして、キャッ、キャッとたわむれる。泳がせてやろうか……ね。

こういう流れを経て、われわれはリーダーとなったのだ。

1964年7-8月号

## 「 シ ド ウ シ ャ 」 に つ い て

われわれは、英語のリーダー(Leader)に普通、指導者という訳語を用いている。これはリードする人という意味である。先導者。

ところが、指導者という日本語は、往々にして曲解され易い。その一つは、全体主義の指揮者、すなわち、かつてドイツのヒットラーが用いたフューラー(Führer)というドイツ語、これも指導者である。大きなワンマンであり、陣頭指揮タイプである。牽引車(者)だ。

今のような、民主的な組織において、もし、このタイプで臨むならば、その結果は指導にならないで死導となるだろう。個性を殺すからである。

スカウティングは、自発活動に基盤があるので、スカウト1人1人はそれぞれ自分のエンジンを持っている。リーダーは、それを始動させる人だから、ほんとうは指導者ではなくて始動者なのだという人がある。このいい方には自分から進んで私は指導者でござると名のるのはおこがましいではないか、という点で賛成者がある。

さて、これをさらに一步進めて、仕導者という人があらわれた。これは、奉仕者だという意味を強めているらしい。この仕導者を司導者と書きかえたらという人もある。

以上を文字の遊戯だとかたづけしないでほしい。

要するに、導くという自信を失ってはならないが、さりとて自信過剰で、「おれについて来い」でも困る。快晴の秋空を仰いで、とくと考えてみたいものである。

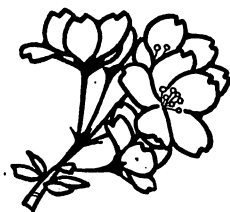
1964年10月号

玉 磨かざれば  
器 を 成さず

＝ るな五訓 ＝  
おこるな おこたるな  
くさるな あせるな いばるな

る 五訓  
聖なる 決心ある 確固たる  
正直なる 正義なる

## 原 理



原理というものは、往々にして雲にかくされやすい。スカウティングの原理にあってもそうである。

原理からルールが作られる。しかし、ルールは時に応じて、改正も、変更もありうる。廃止さえできる。けれども、どうしても改廃できないルールがある。それが原理のもとだといえる。制度についてもルールと同じようなことがいえる。

原理を曲げてまでも、スカウティングをひろめることをしてはならない——という意味のことばが英国の本にある。このことばは、自発活動でもない者をスカウト仲間に入れる必要はないという章に出ているのであるが、スカウティング全体の上で、このことばは活きると思う。

常に原理を守ること。原理によってスカウティングは存在する。原理は太陽である。

太陽は、しばしば雲によってかくされるから、われわれは常に心せねばならない。

晩秋初冬の空を仰いで、こんなことを考えてみたい。

1964年11月号

楽しさは 二人で楽しめば 二倍になり  
悲しみは 二人で悲しめば 半分になる

## 花 の か お り

陽春3月、まさに花咲き鳥歌う季節である。

花には、さまざまな色があり、いろいろの形がある。けれども、それはみな美しい。もし、美しくない花があるとしたら、それは、それよりずっと美しい花と比較しての評価である。そういう評価の仕方はとりたくない。花の個性を無視した評価の仕方だからである。

又、花としての最高の資格は、その色や形よりもむしろ、「かおり」にあると思う。「かおり」の欠けた花は、なんとしても魅力がたりない。

スカウトでも同じことであろう。「かおり」をもつことによってはじめてスカウトらしいスカウトといえると思う。さて、それでは、スカウトの「かおり」とは何だろうか？

答。それは、信頼されることである。

なぜか？

答。信頼にあたいてこそ真のスカウトだからである。それがスカウトの「名誉」だと、B-Pは教えている。

「花は、かおるよ、花の香に……かおりか、ひかりか、ああ、名誉」

スカウトたちは、こう歌いながら、胸をはって春の野山をあるいて行く。

1965年3月号

## 方 法 と は

講習会、研修会、実修所に集まってくる人たちは原理をつかもうとはせずに、方法を習おうとする傾向がある。いろいろな方法を習いおぼえ、それを身につけて万能なリーダーになりたいと思うらしい。初心者というものの心理だといえよう。

スカウティングには、原理と方法とルールの三つがある。一番、大事なものは原理である。原理から方法が生まれ、その方法が原理を曲げて、のさばらないよう、ルールが定められるのである。

だから、方法ばかりを勉強していると、原理に暗くなり、時としてルールを超えるにいたる。これは昔の諺の「論語読みの論語知らず」「山に入って山を見ず」に相当する。

方法での達人は、天狗になり易い。天狗とは原理に暗いものである。原理に明るい者は、むしろ謙虚であり、しかも縦横無尽の力を内蔵している。それは、あらゆる方法は原理から生まれるからである。

それは、原理から生まれた方法なのか？ それとも原理を曲げてまで、あるいは、ルールを曲げてまで作った方法なのか？ この点に鋭利な分析を要す。曲げて作った方法は無理である。無理とは無原理である。邪道ともいい、便法ともいう。

これは、あまりにも、方法にたよろうとすることから起った結果である。

実修所入所希望者に進言したい。実修所は方法を通して原理をつかむところである。それゆえ、方法だけを習う心で入所するならば、それは、おかどちがいである。

つかむべきものは「原理」であって「方

法」ではない。原理さえつかめば、方法はひとりでに泉のごとく湧いてくる。求めているのは、そういう人材であって「術つかい」や「要領つかい」ではない。

1965年6月号

## 人 間 の 可 能 性 を 信 じ る

スカウティングを、まじめにやっている、自分にも、こんなことができるのか——と、可能性を発見する喜びが時々ある。

この可能性を、みんなが総力結集して行けば、この世に悲惨な人間同志相殺の戦争というものをなくして、動物のような下劣さから人類を進化させるという有史以来の大事業だってできないことはなかりう——という気がする。ベーデン・パウエル卿は、その可能性を信じておられた。

ここで人類の進化について考えてみると、科学の面では特に大きな進化をした。月や金星に旅行することだってそのうち実現可能になる。けれども、思想的、ヒューマニズムの上では、釈迦、キリスト、孔子、ソクラテスをしのぐような人間は、不幸にしてまだ出現しない。もう、2000年以上たっているのに……。

けれども、道心堅固、その出現を信じる。

1966年6月号

## 価 値

— その発見と創造とパソオン —

価値を発見し、その価値を高めようとして、その価値の上に、新しい価値を創造し、つけ加える。そして、それを後継者に手わたす……。ここに、人生の価値、生存の価値があるのだと考える。

この公式を、万事にあてはめてみる。

まず —

スカウティングの価値を発見し、その価値を高めるよう実践に励み、そのなかから新しい価値を創り出してつけ加え、それを後継者にわたす……。

そうすることによって、自分の価値も出てくるし、自分も高まるであろう。

けれども、それは、相対的な価値観での価値にとどまったのでは、まだだめで、絶対的な価値の発見ができなかったら、真のスカウティングとはいえない。

絶対的価値は、絶対者と人間との関係を知ることによって、はじめて成り立つ。絶対者とは、神や仏ということになる。

1967年4月号



単独で洞窟探検をするのは賢明でない

EvaluationよりもAssessmentを  
重視せよ  
(結果よりも 過程を重視せよ)

## 生んだもの 作ったもの

生んだものには、生命がある。いのちがある。作ったものには、生命がない。いのちがないから滅びる。こわれる。

スカウティングは、自分で生むものだと思う。ベーデン・パウエルも、それを自分で生んだ、と考える。

生むためには、長い時間をかけて苦しまねばならない。人間が生まれるには10ヵ月の苦しみを伴う。

他人が生んだり作ったものに便乗するだけでは、ほんとうの価値はつかめないだろう。

スカウティングは、そういう原理を教えてくれる。自発活動 — ということを。そしてほんとうの価値というものを。

生むことができる — 自分にも生める可能性があると知ったとき、ほんとうに、神、仏に感謝する心になる。

スカウティングとは、生むこととみつけた。

日々は、生むことの連続である。

1967年6月号

## 自 転 と 公 転

春がきた。わが地球の温帯地方には春夏秋冬の四季が、まことに規則正しく訪れる。これは、地球が太陽の周囲を公転するからである。

地球そのものは自発活動みたいに自転している。これによって、昼と夜、そして時刻が生まれてくる。地球以外の惑星も、さだめし、そうであろう。

こうした太陽系の運動は、誠実にルールに従い、ルールを守っている。スカウト運動もまた、太陽系運動の法則と一致しなければならないのではあるまいか。

すなわち、自己研修（自転）だけがスカウティングではなく、公転して、他との協働に努め他と調和し、他を益さなければスカウティングではないと思う。国際関係というものも、そのあり方は、この、公転運動でわかるであろう。国際コースとは、公転の原理と方法を探究してそれを実行するコースである。

B-Pは永久不滅の太陽であり、光と熱と引力とを備えて、人種、国境、階級、宗教、言語、風習の差別なく万物を照している。

B-Pは永遠に世界の総長であり、われらの太陽である。

1961年3月号



慈悲は 草木の根なり  
人の和は 花実なり



## 観 察 ・ 推 理 の 彼 方<sup>かなた</sup>

世にいう人間形成の教育は、観察、推理という過程をたどることなく一足とびにモラルに向かって行動をおこさせている。しかるにスカウティングだけが、センスの訓練から出発してモラルへと伸ばしている。すなわち、感覚器官の訓練にはじまり、観察と推理を重視する、というのである。Scoutingは「斥候」であろうが、それを意識すれば「観察推理」だといわれる。

われわれは、この観察、推理というものをひとつの「技術」だとみてはならない。なぜか？ それは——観察する（観察される）対象物の物質的様相のみにとらわれて、その事物のことごとくが、大宇宙の霊の作用による神秘的意味を内蔵していることを見のがしやすいからである。

問題は、「いかにそれを解説するか？」にある。

月を指さす、指だけを見て、月そのものを見なかったならば、その観察推理は、真理の解説とはならないのである。そしてそれは、人間形成と結びつかないものになってしまう危険が多分にあると思われるが、いかが？

1967年8月号

## 個人主義と利己主義 とはちがう

西田幾多郎著「善の研究」岩波文庫版170  
ページに「個人主義と利己主義とは厳しく区  
別しておかねばならない」とある。

昭和中期の全体主義横行の波は、個人主義  
を利己主義と混同させてこれを非国民扱いに  
した。今のマスコミ時代も、個人を一律に同  
形化せんとしている。柳は緑、花は紅である  
べき天来の個性を尊重しなかったら、それは  
悪平等だろう。

スカウティングは、その意味からいうと、  
決して一律的団体訓練ではない。ただし、個  
人主義が利他奉仕を忘れたならば、それは利  
己主義に陥る。

真の個人主義は共同主義と一致する — と  
西田哲学は説いている。

柳は緑、花は紅であることは、神のたまも  
のであるとするならば、少年だとしてそれをう  
けた自発活動にその生命の、それぞれの本源  
が秘められているはず。

1967年9月号



「通信は通神である」と、いった人があ  
る。それは神がかりだとしても、「通信は通  
真」であろう。

スカウトは誠実である — から……。

1967年10月号

## 通信 — とは

スカウトの修める技術の中に「通信」があ  
る。それは、手旗信号とモールス信号で代表  
される。けれども、詳しく数えあげれば、カ  
ブのサイン、敬礼、握手、ことば使い、交通  
信号、電話のかけかた — に始まり、追跡サ  
イン、暗号、絵文字などから、少年部の身ぶ  
り、笛信号、手旗、モールス、それも視号と  
聴号があり、暗号手紙そして少年信号章があ  
る。年長信号章には、鉄道、舷灯、霧笛、時  
鐘、気象、警鐘、サイレン、掌形信号それに  
国際旗旗 — というように専門化する。

総じて、通信訓練、特にその中でも手旗と  
モールスは、指導者にとっても、スカウトに  
とっても、むずかしいものといわれている。  
信号が得意でない隊長は苦勞する。

そのためか、これは「技術」だという考え  
方にどうしても陥りやすい。したがって、信  
号手という技術屋を養成するかのごとく誤認  
するものも出てくる。そして便利な携帯通信  
機ができて今日、手旗など時代おくれた  
という者さえある。

これを「技術」だとしか考えなかったら、  
それはスカウティングの方法と目的とを倒錯  
してはいないだろうか？

通信の「信」、信号の「信」は、和訓「マ  
コト」である。マコトを発信し、マコトを受  
信するのである。そこに「相互信頼」が成り  
立つ。「信」とは和訓「タヨリ」でもある。  
そこに人と人とのめぐりあい、交流ができ、  
たより（信頼）に値する人間ができる。「通  
信」訓練はこのような公民資質の形成に役立  
つのである。

（左へ続く）

# 感 覚 訓 練 に つ い て の メ モ

感覚訓練が、青少年の教育に大切だということは、フランスの感覚論的倫理学者エルヴェシウス(1715～1771年)とコンディヤック(1715～1780年)が、いいだしたが、それはただ学説の段階で終わった。

ところが、ほとんど同年代に、スイスの、ジャン・ジャック・ルッソー(1712～1778年)は、仮空の少年エミールを教育するという構想から、有名な「エミール」を書いた。その第2編に、5才～12才に始まる五官の訓練についてその方法を示したことは注目にあたいた。

「エミール」の影響、つまりルッソーの影響は、ペスタロッチ(1746～1827年)、ヘルベルト(1776～1841年)、フレーベル(1782～1852年)、そして、モンテッソーリ(1870～?)、デューイ(1859～1952年)におよび、1906年アメリカにおけるプロジェクト、メソッドの開発やさらに、1920年バーカスト女史によるドルトンプランへと展開された。そしてイギリスの近代教育の土台にもなった。

以上は、教育学者や教育史家の通説である。しかるに、学者たちは、感覚訓練を、いちばん、実際の教育にとりいれ、それを展開させたベーデン・パウエル「スカウティング」という教育法を、知ることが少ないのは、どういうわけなのだろうか？

そして、センス(感覚)を訓練しないで、いきなりモラル(徳性)を教育しようとしている。世にいうところの道德教育にそうした傾向がみえるようである。

1968年4月号

苦しみから逃げる者は  
永久に 苦しみから  
終われ続ける

## 観 察 と 奉 仕

英語observationは観察、serviceは奉仕と訳されるが、この二語は、ともに、礼拝式に関連がある、と、いうことを、新潟県連の斎藤公一氏が発見したという。そして、奉仕するためには、観察が先行し、観察力が必要であると彼は説く。

辞書をひくと、observanceには儀式、式典という別訳がある。serviceには、神に仕える、礼拝式とか式という別訳がある。

observeもserviceもともに、serveという語を抱いている。serveとは、仕える、尽くす、礼拝、信仰、献身などで神に仕えることだと訳されている。

漢語の「観察」には、宗教的のふくみがあるとは想像されないが、英語“observe”にはそれがある。

そこで試みに新仏教辞典で「観察」をひくとカンザツと読み、五念門(阿弥陀仏の浄土に生まれるための行為を整理した考え方)の5つあるその第4に「阿弥陀仏の浄土の功德をさまざまに観察する」とある。そして(1)礼拝、(2)讃歎、(3)作願、(4)観察、(5)回向、これを五念という、と記されている。

スカウティングにおいて、その序曲である観察と終曲である奉仕とを、いかに関連づけられた行動律に織りあげ、染めつけるかを考えてみようではないか。

1968年6月号



## 経験の教育

「行なうことによって学ぶ」

(Learning by Doing)

「失敗は恥ではない。しないことが恥である」

ということばを、ベーデン・パウエルは、しばしば、くりかえした。

これを、「実践躬行」つまり、「まず、実行する」と佐野常羽先生は、のべられた。

スカウティングは、経験によって自啓する教育だといえる。

その経験というものは、外からくる経験、すなわち、感覚する経験と、内からくる経験、すなわち、反省による経験が土台である。この、2つの足で、未知の荒野をあるくのである。

あるくから、未知のところが道になる。すでにある道があるくのは開拓ではない。先駆者ではない。

1968年7月号



軟らかいものを (食べやすいものを)  
与えるだけでなく  
固いものを  
噛みちぎって 食べさせるような  
歯ごたえのある教育をやろう

出来ないことを 出来るように  
分からないことを  
分かるようにするのが  
教育というものだ



## 野性味について

近頃のスカウトたちは、野性味が乏しい——という声が出ている。その意味は、野営地に着いて大自然にふれても躍りあがることなく、大都市の生活と同じ振幅で、無気力だということらしい。はたして、そうなのだろうか？

今夏、各地での夏期野営あたりで、どうであったか考えてみたい。成人たちが、周到に計画し準備し、お膳立てしすぎると、スカウトたちは、それにあまえ、安全にして快適な野営に馴れて、野性味を味わえなくなるのではなかろうか？ 野営地そのものも、手入れされつくして庭園のような傾向はないだろうか？

ほんとうは、野性味を満喫したい年頃の男の子なのであるから、成人たちは、その点を考えて、よい意味での野性味を伸ばしてやろうと思うが、いかが？

1968年10月号

# ことばよりも心

久留島秀三郎

こんどの世界ジャンボリーに、ギリシャ語はもちろん、英・独・仏と3ヵ国のことばを話せるスカウトがいるとは思われず、まあ、どれか1つでもちょっとわかれば、ジャンボリーというものは、じゅうぶん楽しく、心と心の交りはできると考えた。また、そうであったと思う。

ところで、さあバス旅行、これは団体旅行で、他国人と日本のスカウト1人1人が話す機会は、まあおみやげでも買うときぐらいで、そんなことは問題ではないと考えていた。

ただひとつ私の気にしていたのは、スイスのバリセレンという小さい町で、40人が家庭に迎えられ、90人が野営という予定、野営の方は問題でないが、家庭にとまるスカウトが問題だった。

だいたいスイスは3つのことばが、3つの地方で使われている。バリセレンはドイツ語である。特別の人以外は英語なんて話さない。ところが日本のスカウトにドイツ語の話せるのは、きわめて少ない。家庭にとまって英語が通じなくてはと、それを心配していた。

ところがどうだったろう、40人というのが、いよいよとなると130人全部を家庭に迎えたいということになった。ありがたい。だが、ことばはと……。

皆がみな、旅行中でいちばんよかったのは、このスイスの家庭でとまった1夜だという。まったくこれは心と心の交りだった。ことばが不通でも、心と心、スカウトの心は世界に通じる。ほんとうにうれしい。

私の心配はムダだった。ことばよりは心。

ところがもうひとつ……。有益だった欧州バスがいなか道でエンコした。なかなか動かない。そのときにその付近の人々が、おとなも子どもも、はじめて見る日本人——それはユーゴスラビアのこと、こんなところに日本人がきたのは、こんどが初めてで、歴史的なことである——そのいなかの人が、いかに、親切だったか、それを皆がいう。だれひとりユーゴスラビア語のわかるスカウト、スカウターはいなかった。また、むこうにも日本語のわかる人はいない。それでこのときのスカウトは、彼らの親切な気持を感謝しているのである。向うの人も日本人に好感を持てればこそである。 “ことばよりも心”



## 自然観察

- ・取らないで 見よう
- ・花に 鼻を近づけよう
- ・名前に こだわらないで 見よう
- ・取らないで、見よう
- ・行かなければ 見つからない
- ・生き物達の 繋がりを 察しよう
- ・生き物達の ドラマを見よう
- ・ミクロばかり見ないで

マクロにも見よう

自然観察は理科の学習だけではない

# こ れ か ら の 道

渡邊 昭

日本の経済が世界で5指のうちに数えられるほどに成長したのに従い、また、オリンピック大会など数々の国際的事業の成功などによって、わが国は他のあらゆる方面でも注目の的となるようになってきました。第13回世界ジャンボリーの開催に対しても、日本への期待は私たちが考える以上に大きいようであります。外国から見れば、日本のスカウティングは、日本の国力に相応する力を持っても当然と考えられるのでありましょう。戦後の日本は、一般に、どちらかといえば対外的にはあまり積極的であったとはいえません。しかし、そのなかでスカウティングは、国際的活動にも随分力を入れてきました。その成果でありましょうか、最近に至っては、私たちが好むと好まざるとにかかわらず、外へ出ることが要求されるようになってきました。私たちは、倍增運動をはじめ、まだ国内でなすべきことがたくさんありますが、国内の問題のみ専念することは、もはや許されない状況にあります。これからは、国際的活動の上にもさらに責任の一部を分担しなければならないことになるでしょう。

もちろん私たちの運動の目的は、次の時代をになう心身ともに健全な国民を育成することが第一であり、それに主力を注がなければならないことは、いうまでもありません。しかし、それについても、常に私たちが世界のなかの日本であることを忘れず、他国のスカウティングに学ぶ段階を1日も早く卒業して、より多く与える国になるよう努力しなければならない時期がきつつあると思うのであります。これは、謙虚さを失うことでもなく、どこの国にも共通する方法を発見しよう

ということでもありません。運動の組織的活動についても、教育方法の整備についても、何よりも大切なスカウティングの質についても、日本のスカウティングでありながら、他の参考になるような高いレベルのものでありたいと望む意味であります。

## 前 を 正 し

## 後のいましめとする

尾崎忠次

このスカウト運動に携わる全国の成人指導者としての私たち同志が、この運動をあまねく全国津々浦々まで広め、栄えにするために、あらゆる努力を払う際に、是非とも考えていかねばならないことが3つあります。

その1つは、ベーデン・パウエルの教え(最後のメッセージ)の精神をわれわれの心の支えとすること。次は人に後指を指されないようにすること。第3はこの運動を信じ、少年たちをこの運動によって、りっぱな市民に仕上げるよう最善の努力を払うことであります。それには、私たちが約束によって定められたこのスカウト運動の規定を忠実に実行することです。

「前を正し、後のいましめとする」という古い中国の諺があります。もし私たち成人指導者が、基準に反するようなことをしていたら、ただちに反省し、正しい道を求めて進まねばなりません。それはちょうど病気をなおすのと同じことで、このスカウト運動を健康にし、少年たちを幸福にしてやることになるのです。

形ばかりスカウトの服装をしていても、内容が基準に沿っていなければほんとうのスカウトとは言えないわけで、スカウティングに奉仕をされるすべての方々は、常にスカウティングをレールからはずさないように、ふり振り返る必要があります。

自己批判をすることは、スカウティングとそうでないものとを区別する大きな指導標であるとも言えます。家はいつも掃除しなければなりません。顔は毎朝洗わねばなりません。家を掃除し、顔を洗えば、垢やほこりが取れてすがすがしくなります。

私たちの先輩によって築きあげられたスカウティングも汚さないように、常にきれいにすがすがしいものにせねばなりません。「流れる水は腐らない。扉の心棒はさびない」と言われます。スカウト運動が正しく進展するためにも、私たち成人指導者は、常に正しい努力を続けていかなければならないと思います。



## 外から見た スカウティング

木村 正雄

「この子は内弁慶で、気も弱く将来が思いやられるので、団体訓練で鍛えてもらうため、ボーイスカウトに入隊させたい」と言うたぐいの話を聞くことがある。昨年1月、小・中学校の先生方による全国的研究集会の折、ある提言の中に「自分たちで自分の行動を決定することのないボーイスカウト型の生徒」という表現があったことを新聞で見て驚

いた。いずれの場合もスカウティングに関心が示されているのは有難いが、それが正しく理解されていないのは残念であり、われわれの力が至らないのを反省したい。

思うに、人目にふれるスカウト活動は大集団の行事類がほとんどであることにこのような誤解の一因があるのではないだろうか。団創立何十年記念の盛大な式典、地区や県連のジャンボリーやカブラリー、そして街頭パレード、最大のものに全国的な祭典・日本ジャンボリーがある。昨夏、2万6千人が参加した7NJでは、堂々の開会式、皇太子ご一家をお迎えしてのジャンボリー大集会は10数万の参観者を集め、TVや新聞で華々しく報道された。ところがスカウト活動の一番基本で最も大切、有効な訓育方法である日常の小グループ活動、つまり組集会や班作業、あるいはこれらの連合したやや大きなグループ、つまり隊の活動でも、関係のスカウターと両親方以外の人に見てもらふことはごく少ない。

ところで、わたしは今ここで、大集団行事が悪いとか、やめようなどと言っているのではないし、班や組の集会を大勢の人に公開して見物してもらふのを奨励したいのでもない。外からのこのような「スカウト観」をひとつの反省の資として、スカウト活動の基本は小グループ活動で、これを通じてのみ、ひとりひとりのスカウトの成長、進歩が助け励まされることを忘れぬようにしたいだけである。大集団の行事が盛大に整然と展開されるのは参加スカウト日常の小グループ活動の成果のひとつの表れであって、大行事が訓育にそのまま役に立っているわけではない。参加者が多くなれば、なる程、集会や行事の形式、組織、プログラム、さらには目的までがスカウティング本来のものから離れて行きやすいと言うのは言い過ぎだろうか。

1979年2月号

# スカウティング・ フォア・ボーイズを 初めて手にしたとき

## 二 荒 芳 徳

それは大正5年のころであった。静岡県で視学官をしていたとき、沼津に別荘を持っておられた西郷侯爵が、欧州を巡遊して帰朝され、静岡市になにかの用事で立ち寄られたとき、ロンドン土産としてこの書物を一冊持ってきてくださった。内容についてはあまり深くは、話されなかったが、当時、発足してあまり古くないScoutingの唯一の著書として、まったく珍しい本であった。当時、英語の先生などにも読んでもらったが、おもしろいことはおもしろいが、これがどんなふうに行なわれるものか、いっこう見当がつかなかったが、佐野先生がギルウェルで修業なさって帰国されて初めて、その紙上に現われた趣旨が明らかにされたのであった。初めてこれを学んだときは、なんとなく30、40のおとなが狼や鳩のまねをするのは気恥ずかしいような気がしたが、「童心に帰れ」ということがだんだんわかってきたのは両3年たつてであった。

B-Pがつよく、Scouting Drillとは絶対に異なる。号令をかけられ行動するのではなく、あるSuggestionで行動するのだといわれたが、これが長年月、「号令式」で鍛えられてきた学校指導者、ならびに軍隊指導者にはなかなかのみ込めなかった。

山中の野営のとき、天幕の張綱に白紙を付して夜間、つまずかぬようにしたとき、佐野さんがひどく叱って、“自分の張った綱に足などとられるようなことではスカウトにはなれない”といわれた。

また、創業の後以来は団杖(だんじょう)がたいへん重んぜられ、必ずこれを携行したものであった。「杖門の礼」のごときも、先輩を迎える重要な行事であった。

あれは、杖を剣に擬して昔の武將を迎えるときの、情を示したものであった。「三指礼」は無条件で採用されたが、「左手握手」はながく論議があった。もっともこれは日本では握手をする場合が少なかったからであろう。

「三指礼」が問題にされだしたのは陸軍の中枢もスカウトに関心を持つに至ってからで、これは第三者たち、軍人に限っていた。

“備えよつねに”の標語は初めは、“準備あれ”とか、“備えあれ”という英語調であったが、後、仏語調の“備えよ常に”のほう力が強いので、それにかわったのである。

スカウト運動も今は、説明を要せぬようになったが、スカウトは英語の“袴”——スカート——という意味とどう関係があるのかという質問が出たこともあった。

考えてみれば長い歴史を経過したものである。Hikeという語も一時、ほとんど忘れられていたのがB-Pによって世に復活したのである。

疾風に勁草を知る

(困難や試練に出会って、  
はじめて  
人の節操が堅固で、  
あるかどうかを  
知ることが出来る)

# 今日もまた野外に学ぶ

## 今田忠兵衛

昨秋、六甲山にハイキングをした。山の教育植物園では、林園長の臨地講話をきいた。

「山や森に自生している木というものは、それだけが育っているのではなく互いに助けあっている。ソラあめの30メートルの高いまつの木もその下には、10メートルのさくらがあるでしょう。さくらの下には、3メートルのあじさいがあり、またその下には1メートルのあじさいが茂り、さらに下に50センチのくまざさ、つぎに5センチのこけ類といったように。根っ子が互いにおさえあって協同生活をして美しい林相をなし、それぞれが生長している。自然の姿は、どこでもみんな、こんなものなんです。これでこそ山の強い風雨にも耐えてきたのです」との話であった。

私は、美しい木々のたたずまいに、日本のスカウト運動の姿を思った。日本連盟、県連盟、地区、育成会、団といった各級の組織、これらが各々の職責での分担を忠実に果たし、教育の面に、運営財政の面に、内容の充実を図り、大きな木、小さな木が助け合うように、互いに協力しあってこそ、質と量の調和ある運動の発展が期待でき、今日最大の課題として取り組んでいる組織拡大の計画も、この姿に進まねばならないと思った。

団体企業体から家庭まで、人間社会はこうした連帯のなかで繁栄し、かつ強い風雨に耐えていくことを、自然は教えていた。

秋晴れの山の頂きに、白い雲の流れていくのを眺めながら私は、大きく深呼吸をした。

いまひとつ。園内でその時、木から落ちたしいの実を拾った。記念に家に帰って植えようと思い、花のタネの袋などに種マキ時の書

いてあるのを思い出し、何気なく園長に、「これはいつごろが植え時ですか」と質問したところ、「落ちた日が播種期ですよ」のひとことがハネ返ってきた。私は自分の愚問に恥じながら、このアタリマエのことに、深い感動を覚えずにはいられなかった。

1974年5月号

桃李不言  
下自成蹊

人間が尊いという意味は  
その人しか持っていない  
かけがえの無いものを  
持っているからだ

富は 墓場まで持って行けない

(鉄鋼王 カーネギー)

地位や名誉は 墓場まで  
持っていけない

経験や知識は 墓場まで  
持っていけない

# 信頼されるということ

## 松平頼明

私どもは、人間はお互いに信頼し合わなければならないと教え込まれてきましたが、近ごろは新聞などで、たびたび人は信頼できないというような記事を読むことがあります。

人間相互の信頼は口で、知識で教えられるものではありません。ふだん、それが実行され、その結果を見て、それが信頼に値するかどうかを他人が評価してくれるものだと思います。

話はいささか旧聞にぞくしますが、今から21年前、ロサンゼルス郊外で第3回全米ジャンボリーが開かれました。そのとき、私はロサンゼルスから東南約160km程のところにある当時世界一の反射望遠鏡を備えたパロマー山天文台を見学に行きました。車で山を登って頂上に近づくと、ふた抱えもみ抱えもあるヒマラヤ杉が立ち枯れていて、そのそばを通り過ぎました。

アメリカではよく山火事の話聞きます。こんなところで火事でも起こしたら、たちまち世界一の天体望遠鏡は灰になってしまいます。だから道路には「ノー・ファイヤー」(火気厳禁)という立て看板が立っています。ところが、その中のひとつに「ボーイスカウトは除く」というのに目がとまりました。アメリカのBS隊長は、野外で火を起こすとき格別な注意を隊員に守らせています。だから山火事を起こしやすい所でも、BSに限って炊事することを許可しているというのです。

隊長も隊員も、ふだんからスカウトの“ハンドブック”の注意事項を厳重に守っているのです。社会の信頼を厚く受けており、この立て看板のような例外的扱いとなっているということを、そのとき案内してくれた人から聞きました。

ですから、たとえひとりのスカウトでも、もし社会から信頼を失う行為を犯せば、たちまちボーイスカウト全体の名誉や信頼を失い「ボーイスカウトは除く」という例外措置は取り除かれてしまうことはいうまでもありません。スカウトの名誉は信頼されることにありということ、もう一度確かめましょう。

1974年10月号

## 青春とは

### 岩波信平

青春とは、人生の若き年代のある期間のみを指すばかりでなく、それ以上に心の様相を言うのである。

この心の様相とは、秀れた想像力・たくましさ意志・燃ゆる情熱・困難を克服する勇猛心・安易を振り捨てる冒険心—かかる要素を指している。

年を重ねただけでは人は老いない。

—理想を失うときにはじめて老いがくる。歳月は皮膚のしわを増し、肉体を退化させるが、情熱を失うときにこそ、青春は老いしぼむであろう。

年は70であろうと、16であろうと、その胸の中にいだき得るものは何か。

—曰く「驚異への愛慕心」。すなわち事に処する勇敢なる挑戦・子供のように求めてやまぬ探求心・人生への歓喜と興味。

神より、大地より、人より、美と喜びと勇氣とそして壮大にして威力ある靈感を受け続ける限り、人の若さは失われない。

## 使命感と情熱

東野 一郎

「人は信念と共に若く、疑惑と共に老ゆる。  
人は自信と共に若く、恐怖と共に老ゆる。  
人は希望と共に若く、失望と共に老ゆる。」

私は、この故人の名言を味い、限りなき魅力と勇猛心を覚える。

そして、ボーイスカウト運動とは縁遠きたわごとかと自問する。

思うに、B. P. は限りなき青春を歩み続けたのではなかろうか。

1977年11月号



理想ほど 弱いものはない

だから

死にも狂いで 守らなければならない

人の力は 和ではない

(人の力は 足し算ではない)

$$3 + 3 + 3 = 9$$

人の力は 積である

(人の力は 掛け算である)

$$3 \times 3 \times 3 = 27$$

周知のように、ボーイスカウト運動は世界中、すべてボランティア活動によって支えられている。しかし、このことが正しく理解され、実行されているかということになると、いささか疑問が残るのが昨今の現況ではなかろうか。

ボランティア活動は、そもそも、ヨーロッパの中世紀の宗教戦争の「十字軍」参加者のいわゆる「義勇軍」にその名の源を持つものである。昨今では、その本当の精神が誤り伝えられ、無料奉仕の代名詞のごとく考えられているように思われる。元来、この言葉の底には、宗教的使命感（ミッション）が脈々と流れているのである。したがって、真のボランティアとは、この精神に満ち満ちていなければならないはずである。何物にも優先する使命感が必要で、その結果、強い責任感と燃えるような情熱が生まれてくるのである。B-P 卿のいわれる奉仕の精神とはこのことを指すのであって、単に、労力と時間を提供することではない。

最近の若い人々を見ているとちょっと気になることがある。ボーイスカウト運動に奉仕するとき、自分自身の個人的なことが優先され、なお時間的余裕があれば参加する、という形が多く見受けられる。もっと使命感に徹すれば、この順序は逆になるのではなかろうか。確かに、世の中はせち辛く、忙しくなっている。といって、ボーイスカウト運動への参加は、人生の中での単なる「閑時作業」として考えてよいのであろうか。

1981年12月号



# 仲 良 く 歩 く

## 三 島 通 陽

「家にあれば筈に盛る飯を草まくら、旅にあれば椎の葉に盛る……」

後藤新平さんは、さもうれしそうに、顔をほころばせて、私を顧みてこういった。

それは今から30余年前、まだ日本に、ボーイスカウトができたばかりのころ。福島県下の、とある美しい湖のほとりに、キャンプをしている少年たちから、時ならぬサンタクロースのように喜び迎えられた後藤のお爺さんに、少年たちが手製のライスカレーを、お皿の代りに、大きなキャベツの円っこい葉に盛って差し出されたのを見て、後藤さんが鼻眼鏡をふるわせて喜んだ時のことである。子どもの心は、後藤さんにかよい、それがまた、遠く万葉の歌を通して、古人の心に通っていると、私はほほえみつつ思ったことであった。

キャンピングを真に楽しむと、いつも心は遠く古の人の心に通うことを感じる。そして古人のことばを味わい、頭が下がる。それにつけても、このごろのキャンパーやハイカーは、なんと自然を傷つけ、そこらを汚すことか。私はいつも、俳聖芭蕉の「行脚のおきて」を、今のわが国のキャンパーやハイカーに知らせたいと念願する。

学生のキャンプの歌に「白樺どんとたいて」というのがある。白かばなんか、どんとたかれてたまるか。アブレ・キャンパーは、いくらストリップがおすきだからとて、木を切って山まではだかにしたいおつもりか。

芭蕉のおきての数々の中に「腰に寸鉄たり

とも帶すべからず、総てのものの命をとることなかれ」なぞ……スカウトのキャンプでは、たき木を集めるのに——枯れ枝を拾え、立木からは下ろしてもらいたそうな顔をしている枯れ枝だけを探せ——とのおきてと相通ずるものがある。

また「主あるものは、一枝一草たりとも取るべからず、山川江沢にも主あり、つとめよや」ともある。また、おきての中には、「山川旧跡親しく尋ね入るべし、特に私の名をつくることなかれ」ともあり、これは、近ごろよくある類。この川はライン川に似ている、日本ラインと名づくべしなども、いかがなものか。

芭蕉は、造化に親しみ、造化にかえれといい、世界的のキャンパー、ネスムックは、キャンピングは自然のふところにかえる心ともいう。

今のお行儀悪い日本の多くのキャンパーは、自然を荒らすことをキャンプとと思っている。キャンプほど青少年のためになるものはない。またキャンプほど、ためにならなくなるものもない。それは心がけひとつでどっかになる。

ハイク (Hike) とは、スコットランドの古語で、「仲よく歩く」——というような意。もう死語になっていたのを、英国のスカウトが復活して用いたのが始まりで、世界にひろがり、わが国でも流行しているが、さて、その心は知らずにいる。しかし、これは、わが国の古来の行脚、雲水、遍路、巡礼、武者修業等、大自然の中に、心の修業をした人々の心と通じるもので、わが国の人にその心がわからぬはずはないものである。

# 日本を考える

櫻井 洗

亜熱帯から亜寒帯圏にまで、南北に伸びた複雑な地勢からなる、海に囲まれた自然条件の中で、日本人は長い訓練をうけながら、その自然にどう調和させて生きていくかを工夫し、すぐれた適応性をつくりあげて来た。

たとえば自然美を自由画模様として染めあげた着物、多雨、多湿、温暖な気象条件に適した主食である米の栽培と、醗酵によるみそ、しょうゆを基調とした食生活、湿気もたらす苔(け)むす庭園に「わび」や「さび」の美意識をもとめた家屋等、特徴ある日本の衣、食、住の文化がつくられた。

また昔の日本人は人間能力の開発を尊び、異質文化をたくみに同化させて来た。ところが昨今は、追いつけ追い越せを急ぐばかりに全くの物まねが多くなった。異常なまでの高度成長につぐ石油危機による他国に見られぬ程のショックも、また、然りである。外国から技術を導入してのマスプロダクション、隣がうまくいけばそれをまねての過当競争、あげくの果ては共倒れをせざるを得ない。

今こそ忘れられていた日本人本来の能力開発による独創性をよみがえらさねばならない。人の育成は、生まれてすぐから始まると言えよう。まずひとり立ちをするには転んだらひとりで起き上がる体験をさせることが必要である。しかるに今の親たちは転ぶ前の支えをして、いわばひとり立ちの芽をつみながら一様に有名校、有名大学を目指しての家庭教育をやる。それを受けて小学校、中学校、高校、はては大学へとペーパーテストの点数を基準にして本人の特質はほとんど考えられることもなく、画一的に指導されている。

ここに個人の特質、特技を伸ばすボーイスカウトの教育、訓練に期待されるところが大きいことを強く感じる。特に50数年の歴史を経た日本のボーイスカウトとしては、立派な社会人づくりを目ざす運動として、家庭、学校、地域社会に、さらには職業を通じて限りなく反映されなければならない。

1976年5月号

教育とは、希望を語ること

学ぶとは、希望を胸に刻むこと

風鈴は 風が吹かねば鳴らない  
釣鐘は 打たねば鳴らない

心 ココニ 在ラザレバ  
見レドモ 視エズ  
聞コエドモ 聴コエズ

「面白い」とは違って  
「楽しい」ということは  
何時までも、心に残るもの  
の ことである

# 育　て　る　こ　と

佐藤俊夫

数年前の研修所で、ピクニックに出かけた  
ときのことですが、ひとりのおばあさんが、  
30本余りの“ひいらぎ”の苗に水をやってい  
ました。私が「お楽しみですね」と声をかけ  
ると、おばあさんは「ハイ、でもこれがもの  
になるのには、孫の代でしょうね」と語って  
いました。

植木や草花の世話をしていると、どなたに  
も経験がおありでしょうが、つくづく生命の  
尊さ、美しさがわかります。1本の小さな草  
花を咲かせるにしても、平生から土づくりや  
肥料の加減、消毒、季節に応じた水のやり方  
など、いろいろと心くばりが必要になります。

趣味としての花木づくりにして、こうです  
から、人づくりは一層たいへんです。人育て  
の道にたずさわる者の任務は、その責任が重  
かつ大であることを痛感します。

鉢植えは、やり直しがききます。ところが  
子供の訓育には、やり直しがきかないので  
す。このことを私は常日ごろ肝に銘じていま  
す。

ボーイスカウト運動の歩みをひもときます  
と、幾多の先輩たちが営々と積み重ねてこら  
れた尊い足跡がしのばれます。その長い伝統  
を受け継ぎながら、将来への発展をはかるた  
めには、今何をしなければならないのか、と  
考えずにはおられません。

仲良く、楽しく遊びたいというスカウトた  
ちの願いをかなえられるような指導性、ひと  
りひとりの個性を伸ばすために、常に新鮮な  
目でながめられるような若さ、そのためには  
どのような技術を、どのような方法で身につ  
けたらよいのか、悩むときがあります。

スカウトたちが、持てる力を十分に発揮で  
きるような集会の計画、参加あるいは出席し  
てよかったと喜んでもらえるような隊、その  
ような団をつくり出すためのあり方を求め  
て、ともに語り合いながら、あすへの道を切  
り開いていきたいものだと思っています。

1976年4月号

## ま　な　こ　開　き　て 見　き　わ　め　よ

千葉和久

福岡県の脇山という所には、たいへんいい  
野営場があります。そこで、以前に実修所が  
開かれたときのことですが、朝礼をする場所  
に、1本の見なれない木がありました。

「これは何でしょう」という質問に、さっ  
そく「木です」という答えが返ってきて、爆  
笑が起きました。「桐の木です」と答えた  
人もいました。「油桐です」という返事もあ  
りました。

いろいろ質問しているうちに、答えを集約  
すると、それは中国原産の油桐という木で、  
この土地がむかし、東南アジアの各国から、  
青年たちを集めて農事研修を行った場所なの  
で、この木は中国からの参加者のひとりが記  
念に持って来て植えたものだということがわ  
かりました。

油桐は、名前のとおり、この木の実から油  
が取れ、それが工業用のほかに唐かさやちょ  
うちん、油紙などの製造にも使われたので、  
日本へ大量に輸入されていたそうです。

あまり目立たないたった1本の木が、見る

## スカウティング と 微笑

井 野 一 郎

人次第で、こんなにいろいろのことを語ってくれます。ベーデン・パウエルは「スカウティング・フォア・ボーイズ」の中で“雪の新聞”のことを書いています。私たちのまわりには、いつでも、どこにでも、たくさんの新聞が用意されていて、私たちが読んでくれるのを待っています。しかし、残念ながらその文字を読み切れない場合が多いのです。スカウティングといい、ルック・ワイドといい、ローバリングといい、観察し、推理し、判断するためには、いつでも引き出せるように整理された広く、深い知識と経験を積み上げておくことが必要です。

そして、それはどんなことにも興味を抱き、疑問を持ち、見きわめようとする若い心と不断的努力を継続することによってのみ得られるものでありましょう。

まなこ開きて、見きわめよ  
耳そばだてて、聞きただせ  
われらに不断の 準備あり  
手足に 心に ああ準備

1976年8月号



スカウト諸君、私たちはどんなに苦しいときでも、つらいときでも、体全体に微笑をみながらせ、スカウト活動を展開しよう。顔から体から明朗かつたつさを発散させることは、かならずすばらしい幸福をもたらすことであろう。

中国の古語に「一笑一若一怒一老」ということばがあるが、正に言い得て妙である。

1976年12月号

ベーデン・パウエル卿はその著「スカウティング・フォア・ボーイズ」の“キャンプファイア物語18”の「微笑」の項で「笑いの不足は健康の不足にほかならない。できるだけ多く笑いたまえ——それは健康によい。だから笑えることがあったら、いつでも笑い続けたまえ、できたらほかの人たちも笑わせたまえ。その人たちの健康にもよいことだろう。」と述べられている。

日本でも“笑い”を高く評価した格言として「笑う門には福来たる」「笑いは人の薬」「笑う顔に矢立たず」「笑うて損した者なし」「笑って暮らすも一生、泣いて暮らすも一生」などがあることはご存じのとおりである。

たしかに笑いを忘れた人生は、なんと索漠（さくばく）としたものだろう。このことは身近な例として家庭生活はもちろんのこと、スカウト活動についても笑いを失ったときどんなに冷たく、陰気なものになってしまうかは想像できる。笑いは生活、活動の根元と切っても切れない関係にあるからだ。

笑いが消え、心に痛みがある場合は呼吸が短い。つまりため息をつくのである。これに反して心持ちが愉快で、快適な状態にあるときは吸う息が長い。このことは、われわれが日常体験するところである。

笑いは力強く深い胸部の運動をもたらす。そして肉体的、精神的な健康の増進に大いに役立つのである。いつも朗らかに、明るく、笑いを忘れない人は心身ともに健康な人の証拠である。

(左へ続く)

# 水とスカウティング

たかのし りゅういち  
麻 賀 隆

人間の体の3分の2が水であることは、今さら言うまでもありませんが、水がなかったら人間は一体、いく日ぐらいしか生きていけないでしょうか。

このように生物に欠かせない水の存在ですが、この際、私たちはあらためて、日常生活に占める水の役割を考え直さなければならないと思います。

私たちスカウトは、自然の中の野外活動で水が大事であることを、常に訓練なり、野営の中でテーマに取り入れています。

水が人間生活にどんなに大切なものであるかということは、昔から国を治めることの一番大事なことからして“治山”と並んで“治水”ということが言われてきました。

私の町では、水をめぐって“水争い”の悲劇が語りつがれています。遠い昔の寛永年間以来、水をめぐる悲しい争いごとが古文書に36回も記録されています。

私はフィリピンジャンボリーに参加した時日本の水の“うまさ”を知り、日本に生まれた喜びをかみしめました。日本では、昔から水利について、その地域開発のために多くの人が長い年月をかけて奉仕してきました。

日本は台風なり、地震なり、火災などの災害が多いのですが、自然を愛し、野外を教える場として利用しているスカウトとしては、常に非常の際の水に対する考えがなければならないと思います。

砂漠の国や雨季なり、乾季なりのはっきりしている国々では、水の利用について、特に飲料水の確保や耕作のため、どんなに苦労しているかを考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

日常生活で、ただ便利なものとして無意識に使っている水ですが、人間生活にとってどんなに大切なものであるかということをあらためて考え、水を生かして使うために、スカウティングにどのように取り入れてゆくかを考えていきたいと思います。

1979年6月号

「ちかい・おきて」の実践の指導とは  
愛を 貫くことを  
身につけさせることである



自 立 心

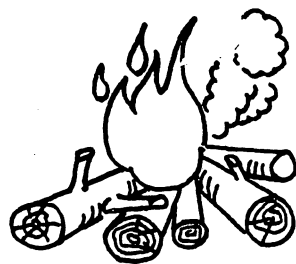
竹 田 正 夫

先日、20数年前に私が隊長をしていたころの隊員（といっても、今は壮年の紳士）が、訪ねて来てくれました。

彼は中学を卒業すると、すぐ大阪の方に就職したので、隊を離れてからは一度も会ったことはありませんでした。現在は独立して店を持っており、商用のため帰って来て寄ってくれたのです。

私たちは懐かしい昔の思い出話に花を咲かせながら、スカウトとして活動していた当時のことをいろいろと話しました。

そのうち、彼は改まった調子で「先生、ぼくは、あの軽井沢の第1回ジャンボリーには行けませんでした」と語り始めました。



## キャンプファイヤー に 思 う

小清水 浩三

この夏のこと、ある職場グループのキャンプファイヤーを見る機会があった。仮設のステージがつくられ、こうこうたるライトのもとで演芸大会が行われていた。

振り返って、私がスカウティングを始めた頃、先輩に教えられたキャンプファイヤーは自然と人生をうまく調和させた心にくいばかりのセレモニーであった。これに魅せられ、毎年の夏には、この行事をいかにすばらしく感動的なものにしようかと熱心に計画を立てていた。いまとはあまりの違いに驚くばかりである。

戦後、日本経済が復興から一時期、高度成長の道をたどったとき、レジャーの名のもとに各地に野営場がつくられ、キャンプは飛躍的に普及し、一般化されていった。

そして、最近は自然を考えず、つくられたもので、歌い、踊り、遊ぶのがキャンプファイヤーであるかのような傾向をみせ、あたかも温泉宿の宴会をキャンプ場に移したに過ぎないという錯覚を抱かせるのは私だけであろうか。こうした風潮に反発を覚え、またどうしてこんな変わり方をしたのかを考えると、キャンプについて長年経験と実力を持ち、その道のパイオニアとして誇りを持つボーイスカウトの一員としていささか責任みたいなものを感じざるを得ない。(次ページへ)

そして、「父が亡くなってからは、母ひとりが働いてぼくらを育ててくれたので、ボーイスカウトに入るのも、無理に頼んで入ったくらいでしたから、そのうえ、ジャンボリーに行かせてほしいとは、とても言い出せなかったのです」といい、顔を紅潮させて、さらに次のように話つづけました。

「ぼくはそれが悲しくて、泣いたりしたこともありました。そのうちに、ようし、ジャンボリーに行けなくても立派なスカウトになってみせるぞと心に決めました。そして、それから後も、困ったときはあのときのことを思い出して、なにくそ！負けるものかと自分に言い聞かせてがんばって参りました。先生がジャンボリーのお土産にくださったチーフリングと浅間山の石は、今でも大切に持っています」

私は彼の話を深い感動を覚えながら聞いていましたが、内心彼にすまない思いがしてなりません。というのは、ずいぶん以前のことなのではっきりしませんが、彼のこのような心の動きに気づき、それにこたえた記憶が少しもないからです。

スカウティングはひとりひとりの少年を育て上げることだと知っていながら、私はジャンボリーという大行事や参加したスカウトの方に目を奪われて、それを忘れていたのに違いありません。彼に強い“自立心”があったからこそ、私はやっと救われたと言えましょう。恥ずかしいと思いました。

1979年9月号

幸運は 努力の積み重ねである

不運は 怠り（奢り）の積み重ねである

今年の野営大会でも、私はこんな経験をじた。新しく指導者になった若いリーダーからキャンプファイヤーにマイクと照明設備を要望された。このことにあえて異論を唱えるつもりはないが、キャンプファイヤーに何を期待するのか、原点に返ってじっくり考えてほしい。そして、もっと大自然との触れ合いを大切にしてもらいたいと思う。

戦後、スカウティングの歴史は30年の長い経過をたどっている。キャンプの方法も時代と共にそれなりに変わってもよいのかも知れない。しかし、私たちが求める目的、精神は決して変わらないし、また今後も変わってはいらない。

キャンプファイヤーの志向の打った球のはね返りが違った方向に帰ってくるならば、その軌道を修正し、正しい方向に向けることこそ、私たちのスカウティングのつとめではないだろうか。

1979年11月号

## 一隅を照す人になる

宮 本 一 乗

80年代の人類の欲求は、「与えられた仕事に最後まで最善を尽くす人づくり」だとも思います。

伝教大師（天台宗比叡山延暦寺御開山）は「国宝とは何物ぞ 宝とは道心なり 道心ある人を名づけて国宝と為す故に 古人の言わく 徑寸十枚是れ国宝に非ず 一隅を照す此れ則ち国宝なり」と、人間国宝の宣言を1,200年の昔になされました。

一般に国宝とは二つとない古い、立派な書物・絵画・器物・道具・仏像・建築物の類と金銀財宝をいうようですが、大師のいわれる国宝とは、生きて働く有為の人材を指して宝と仰せになったのです。宝とは道心なのです。

道心とは菩薩の心なのです。菩薩とは自分に与えられた人生を自分で開拓する、人間形成の姿なのです。日々の向上・努力をしつづけるその姿・その人をいうのです。

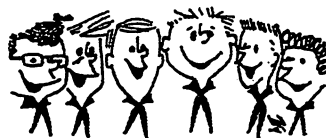
一隅を照すとは、人が見ていようが見ていまいが、人に認められようが認められまいが、縁の下の力もちにおわっても、そんなことに関係なく、ただひたすらに与えられた仕事を忠実に最後までやりとうす人。ポストにベストを尽くす人。その人が居る所には、ほのぼのとした暖かさがあり、笑いがあり、楽しさがあり、明るい感じがする、このような人を一隅を照す人というのです。

真の宝は道心堅固な人、一隅を照す人であり、80年代の欲求の人なのです。

ボーイスカウト運動は、このような一隅を照す人をはぐくみ育てる運動であります。B-P 卿の意は、野外活動をつうじて道心堅固な、自分の知識を社会に還元奉仕する人づくりに他なりません。

諸君、今、私達は知識を、科学を、文化を鼻にかけても駄目です。通用しません。それをつかうことです。人のために、社会のために役だてることです。一隅を照す人になることです。B-P 卿のお言葉をかみしめて、諸君と共にさらに一層の努力を重ねたいと思います。

1981年3月号



# 若者よ大志あれ 神の栄光をたたえよ

石 井 博

札幌農学校（現在の北海道大学）の初代教頭として招かれた、ウィリアム・スミス・クラーク博士は、1年間の契約を終えて、明治10年4月帰国の途についた。彼を慕って送って行った学生と最後の別れの場となった島杉駅で、

“Boys be ambitions in the glory of God”（若者よ大志あれ神の栄光をたたえよ）と叫んで別れを告げた。ボーイとはアンビシャスをもった人のことであり、アンビションとは野心を持つという意味から、ともすれば世俗的方向に考えられやすい。

しかしこれは Lofty ambition（高遠なる大望）の意味であることは、彼の開校演説に述べられているとおりでである。彼は毎日授業を始める前に祈祷し聖書を読んだ。1期生17名は全員イエスを信ずるものとして誓約に署名した。“glory of God”は今日まであまり伝えられていないが、神にみさかえあれと宗教心を強く訴えたものである。

われわれの創始者ベーデン・パウエルは「スカウトを訓練する時、手段にだけ目を奪われずに高い目的をもとう。技術的なものを精神的なものより重んじてはいけない。野外技術、キャンプ、ハイク、クラフト、友情、善行は手段であり目的ではない。目的は人間です。目的をもった人間です。その目的とは次の世代の人々が、たとえどんな世界に住もうとも、健全な精神をもち奉仕のより高い実践をなし、神と隣人への愛とつとめの精神的な奉仕をなすことです。」と語られた。

私はスカウトに与える朝の言葉として、夜から朝へのしじまに素晴らしい鳴き声を聞かせてくれる、ふくろう、キツツキ、山ばと、郭公、ひばり、うぐいす……の鳥の声に、大自然の神秘と神への畏敬の念をもつようにと言うことを常としている。自然のおきてに従いなさい。自然のおきては神のおきてであるから。

神仏を信じよう、そしてスカウティングを信じよう。

1981年7月号



## 「男女共生」

「男女共生」とは、男と女が共に  
尊敬し合い・信じ合い・認め合い  
励まし合い・学び合い・競い合い  
助け合い・愛し合い……

しながら 生きてゆくものだ

こんな素晴らしい「理念」のもとに、今 日本のボーイスカウトは 女子の加入を認め、生まれ変わろうとしている。

社会は改革・進歩してゆかねならない。

日本のボーイスカウトは、その原動力になろうとしている。



## うしろ姿から

志波 栄吉

## 信 解 円 通

鈴木 了正

人間の身体には、うらとおもてがあります。われわれはまずおもてを整えたいもの、もちろんこれもだいじなことであります。

これに対してうしろ姿もわれわれのだいじな一面です。何気ないうしろ姿から、終生忘れられない深い印象を与えられることがあるものです。

このことについて思い出すのは、私がようやく20歳になったころ、一念発起して地方実修所水上道場に入所した時のことです。

たのしかったわれらの班名は「つばめ」。ある日、伐木の実習があり、与えられたのはひとかかえもある立ち木でありました。

さて、班一番の若ぞうの私、誰よりも先に進み出て斧(お)をいれようとしたとき、班一番の年長のMさんが、「ちょっと待って」と私を制されました。

そして、その立ち木のもとにひざまずかれて黙禱(もくとう)をはじめられました。班全員この姿にみせられて黙禱をともにしました。

それから斧は次々おくられて、やがて立ち木は地ひびきをたてて倒れてゆきました。厳肅なひとときでした。

しかし、それにもまして忘れられないのは、立ち木のもとで黙禱されていたMさんのうしろ姿でした。

このとき以来、Mさんとは深い交わりを結び、多くのだいじなことを教わり、よい先輩を得たしあわせを深く味わいました。

Mさんはすでにこの世にはおられません。しかし、私の眼の底にはMさんの敬虔(けいけん)なうしろ姿がはっきりと生きています。

涅槃(ねはん)経という經典の“信ありて解なくば無明を増長し、解ありて信なくば邪見を増長す”ということばに出会いました。この語は、信仰があっても正しい仏教教理を知らなければ、誤った方向に行ってしまう、また、仏教教理を学んでも仏を信ずることがなければ、それはたかぶりの心を増すばかりである、ということを示しています。

私はこの言葉に大きな諭を受けました。スカウティングこそ、少年たちを育てあげることができるのだと思いながらも、創始者によって示され、先輩によって受けつがれてきたこの運動の正しい理解がなければ、単にこどもの集団となってしまうのではないのでしょうか。また一方、この運動の体系と機構を理解していても、真に創始者の少年たちに向けられた大いなる願いに心をひらかなければ、それは高慢な指導者になってしまう恐れがあるのです。少年たちへの深い愛情と、この運動についての研鑽と理解が相まって、期待される指導者たり得るのだと示しているのに気付きました。

マックス・ウェーバーは資本主義がすすんだ社会では“人間は、魂のない専門家と、専門のない享楽人の2つのタイプに分極化してゆくのではないか”といっています。このような社会に生きる私たちは、指導者としての責務を十分認識し、精進を重ねたいものです。

1983年9月号

1982年3月号

# 指導者の心がまえ

中村 遼太郎

最近、琵琶湖西岸の雄松崎にある日本ボーイスカウト最初の野営地の跡を訪ねてみた。ここは、私たちの先輩が大正6年に京都のスカウトを引率して日本で初めてキャンプをしたところだということである。

ここで、その当時、まだ少年で、スカウトたちと一緒に营火を囲み、訓練の様子を見たという網元の老人に案内され、当時のスカウトの話をいろいろと伺った。

風呂敷のネッカチーフに手製の背のうといった姿かっ好は誠に奇異(?)であったが、姿勢は正しく、動作は活発であり、声は大きく、营火の歌声は数百疋も離れた人家にまで、よく聞こえたそう。また、撤营の跡かたづけは立派に行われ、スカウトたちが帰った後の村人の語り草となっていたそうで、村の子供たちにスカウトを見習うよう諭されたという。

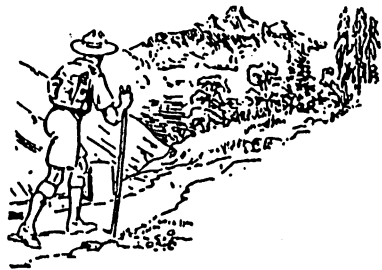
しかし、今回私が別れるときにいわれた言葉は胸を突きさすほどの厳しいものだった。

「今のスカウトはおとなしいですね。しかし後始末ができません。いつも野营から帰るときに、私が点検して注意しなければ……」

この頃、スカウトについて、批判の声を耳にするが、われわれ指導者として実に残念に思うことがたびたびある。もちろん、現在の世相、学校の進学問題、家族制度など多くの問題をかかえた影響で、少年たちの体力が低下し、価値感の多様化によって思慮判断も違っている。しかし、指導者が時代が違うのだからと追従していたのでは、次の世代に奉仕できる立派な公民を育成する重責を放棄することになり、せっかくスカウト運動を理解して、子供たちをスカウトに入隊させる親たちの期待をも裏切ることにもなりかねない。

近く創立60年を迎える輝かしい日本連盟の歴史を一層飾るためにも、私は20年後、30年後になっても、この道に入って奉仕ができて本当によかった…と心から思えるよう日々精進に努める覚悟でいる。

1980年4月号



## 水 五 則

自ら活動して 他を動かしむるは  
水なり  
常に 自己の進路を  
求めて止まざるは 水なり  
障害に逢いて 激しくその勢力を  
百倍するは 水なり  
自ら清くして 他の汚れを洗い  
清濁併せ容るるの量あるは水なり  
洋々として大洋を満たし  
発して蒸気となり 雲となり  
雨となり 雪と変じ 霰と化し  
凝っては冷凜たる鏡となり  
しかも その性を失わざるは  
水なり

# 考 える こと

(反省・工夫・実践)

## 謙 虚

スカウトの集会でよく話すことがあります。健康・誠実・「反省・工夫・実践」そして感謝ということ。今、80年を送るに当り謙虚な気持ちで反省する時、襟(えり)を正さざるを得ません。

1人のローバースカウトとの対談要旨より「学生としてそれぞれの立場において、いろいろな科目の学問を勉強していますが、最近情報過多であり、資料により容易に知識を得ることができるため、知識に走り知恵を働かすこと、すなわち『考えること』が薄らいでいると思われます。考えるということは哲学の心であり、論理学によりさらに真理の追求へと進むものです。われわれは常に哲学の心で反省し、次に論理的に工夫して企画立案へと発展し、倫理学(または道徳)の基盤の上に立って実践するということにより一層発展することができます。考える心より出発してスカウティングの実践をすべきであり、そこに豊富な教えと資料が与えられれば、スカウティングの素晴らしさを発見することでしょう。

かりに植樹について考えてみましょう。まず樹木の選定と風土並びに植樹の時期、樹木の扱い方、穴の掘り方、植樹と肥料や水のやり方など、種々の基本的な知識と準備が必要です。そして何よりも絶対に成功させようと願う心のこもった愛情が必要です。単なる知識のみでなく、十分に考え準備すると共に、心をこめた実践がなされなければなりません。ここにスカウティングの精神が生きているのです。青少年の育成に当たっても、この原

点より出発し、基本をしっかりと教え、青少年に十分考えさせ自主的に発展させられるよう、指導者自らが範を示す必要があります。『青少年と共に』という考えにたって、愛情をこめ誠実にたずさわってこそ成功し発展していくものと確信します。……」

笑顔と握手で再会を約し別れました。本年も後わずかになりましたが、静かに反省し、また新たな年にスカウティングの歩みを進めて行きたいと思います。

1980年12月号

## 両 親 が 果 た す 指 導 者 の 役 割

背 戸 田 農 作

ボーイスカウトの指導者と言っても、必ずしも子供たちと一緒に、山野を駆けめぐる体力や技能を備えた者だけをさすではありません。この運動はスカウトのお父さんやお母さんの理解と協力なしには、その目的を達成することはできません。特にカブスカウトの訓育に当たっては、家路をとりまく近隣社会での生活指導を中心としたプログラムの多いことから、隊指導者と両親の連携協力によってスカウトの日常生活態度を正してこそ、その成果が期待されるのです。

今あなたの子供たちのおかれている社会は何不自由なく豊かです。そうして世の中は一見平和です。しかし次にやって来る時代は不安の多いものだと言われています。こうした時代が長く続けば続くほど、子供たちには自分のことは自分で解決できる自信と、あすに備える心ができていなければなりません。

こうした希望にもかかわらず、今日、青少年の非行は急増しています。子供たちの粗暴行為は家庭内暴力や学校内暴力にまで発展し、最近の少年非行最大の特色ともなっています。このような時代環境下にある子供たちを悪の誘惑から守る唯一の道は、彼らの家庭が健全であることが第一の条件となります。そのために両親にあっては、職場や他人の悪口や不満を言わず、自らの労働と家族の協力によって生活できることを喜び、感謝の心があふれるような家庭を目指したいものです。両親がこうした条件を無視して、子供に果たすべき訓育の手間を省いたならば、彼らが成長した時、大きな欠陥をもった人間になっても彼らを責める資格はありません。

そのうえ今の子供たちは、現代の過酷な競争社会を生きていかなければなりません。どのようにすれば子供たちを、社会に出てたくましく生きられるような人間に育てあげることができるか、これにはやはり両親の責任が重大です。そしてここに、親も指導者としての役割を果たしていかなければならない理由があります。このように考えた時、スカウト教育の場を通し人間関係の中で、タテヨコの関係をよくながめて見ますと、案外多くの場面で親が指導者としての役割を果たさなければならないことに気づくのであります。

1981年4月号

原理不変 社会在変 訓育応変

## あるローバースカウト の手記から

高木 正徳

『私が小学校4年生の時友達のA君は、カブに入っていて、よくカブの話をしてくれた。

舎営に、ハイキングに、組集会に——面白いなあと思っていた。それよりも私をカブに引き入れたのは、正直にいったのかっこういい服装だった。「お母さん、僕、カブスカウトに入りたい」とお願いした。父や母からそろって、「お前やれるか」と言われた時、「ウンやるよ」とあっさり言ってしまった。5年生の12月、十分カブの勉強もしないうちに、ボーイの見習いに入り、明けて3月には上進式を経てボーイの教育を受けるようになった。ツバ広のハットが、とてもうれしかった。

しかし6年になるや、大変なことがあった。隣のA君は、私学に入るために塾通いで、とうとうボーイをやめてしまった。私の母も、お前は成績も、もうひとつなので、私学に入って、高校、大学へと行ける学校に入ってもらいたいと、盛んに私を説きふせ、塾に入ることを勧めた。とうとう私も、普通の人の同じように、塾通いをするようになった。でも私の頭の中では、入隊の時、「やめたらあかんぞ」と言われた隊長のことばを思いだして、よしやったるぞ、最後までと決意した。それというのも自分から進んで、父母にお願いしてこの道に入ったのだから。中学は親にそむいて、公立に入った。この3年間は、私にとって試練であり苦しい3年間だった。高校は長田高に入り、中学の時よりもさらに苦難の3年がつづいた。(次ページへ)

でも私は、ひるまなかった。制服を着て訓練に出る時、さらにやり通さねばならないというファイトが全身にみなぎった。ついに私は、やった。京都大学合格の知らせを聞いた時、私の心は入学の喜びと同時に、スカウトをやめなかった満足感に、満ち満ちていた。その蔭には、私たちを常に見つめ励まし、どんなことでも相談にのってくれたリーダーの方々がいる。心から感謝をしている。努力と根性が、苦難の道を切り開いてくれたと思っている。』

世のスカウト諸君、このローパーの手記が、特別だなんて簡単に片づけてしまっはいけない。尊い体験ではないだろうか。まず気概をもって、やって見ることだ、とことんまで。

1981年5月号

#### 断行そして熟慮

「熟慮断行」という言葉がある  
しかし 現実には  
先ず「断行」しなければ  
問題が解決しない場合が  
かなりある  
そのような時は、  
「断行」有るのみである  
「断行」しながら  
「熟慮」すればいい  
ボーイスカウトでは  
「日々の改善」というらしい

(阪神・淡路大震災に對する  
ボランティア活動の反省より)

## キャンプ生活は テントの中で 暮らすこととは違う

川又光男

「ここでキャンプをしたスカウトに隊長は刃物の使い方を教えていないね」昭和28年8月浅間山麓新鹿沢で開設された、北関東研修所の研修生たちと、数日前同所で開催された関東野営大会の野営地を一巡された折りの古田誠一郎所長の言葉。整然と撤収され感謝の心だけが残されているような野営地も、そこだけは良く見ると、根元で火を焚いたらしく下枝が枯れていたり、皮をはがれた白樺が赤茶けた木肌を見せて醜く立っている。なるほど刃物やマッチの正しい扱い方を知り、ちかいやおきての実践に努めているスカウトたちなら、みだりに木の枝を切ったり、立木の下で火を焚くようなことはしないだろう。ナイフ一つにしてもこれを使う技術と、扱う心を教えてから与えるようにとさとされたものと思う。

ロープの結び方、テントの張り方、料理の作り方等が十分身につけていなくては楽しいキャンプ生活はできない。また地図の読み方やコンパスの使い方ができても、ハイキングで活用できなければ、なんにもならない。日頃の訓練は楽しく実りある野外活動を進めるためのものだ。リュックに詰めたキャンプ用具とテントだけで大自然の中で生活するキャンピングは、高度な野営技術と、細心の注意、創意工夫が要求される。それゆえスカウティングに野外活動は不可欠であり、しかもキャンプ生活はその取扱いいかんによっては、日頃の躰を壊し、悪い習慣をつけたり、恐ろしい事故や遭難にもつながる諸刃の剣ともなる。

B-P 卿は『隊長の手引き』の中で、“戸外生活はスカウティングの真の目的であり、成功の鍵である。しかしあまりにも都市生活がしみこんでいるので、我々はこの目的を軽視し、形式に戻りがちである。キャンプはスカウティングで少年たちが一番待望すること、隊長にとっては絶好の機会である。“キャンプ生活は、テントの中で暮すこととは違うのだ。前もってテントを作ったり、食べ物の造り方を習ったりまでして、自分たちで設営する”から少年たちに魅力があり教育ともなるのだ。

昨今スカウティングに野性味をと、最近のキャンプは、スカウトのキャンプらしくなくなりつつあるとかを耳にする。きたる8月には第8回日本ジャンボリーが、南蔵王で開催されるが、過去のジャンボリーにおいて、行事参加…パイオニア章取得…のためにキャンプ生活がおろそかにされたようなことはなかっただろうか。

指導者として、これらを謙虚に受けとめ、B-P 卿の教えを、いま一度かみしめてみたい、と私は思う。



## まず自らやろう

山口 英一

このごろの指導者を見ていて、一つだけ気掛りなことがある。かつてテレビのコマーシャルに「僕食べる人、君作る人」というのがあったが、何かこれと似たようなニュアンスで、「僕やらせる人、君やる人」という傾向

があるような気がしてならない。人にはあれこれ命令をするが自分はやらないで口だけ出したがる人が多くなってきたようである。ある日、私が奥多摩の山小屋で雨宿りをしていたとき、7人のボーイスカウトが半袖半ズボンの姿でずぶぬれになってきた。小屋の片隅で昼食を取りながらこれからの行動についての打合わせをしていた。雨にも負けず予定されたコースを行こうと雨の日の日照時間のことも考えずお互いに話し合っていたので、こちらが心配になり、「おじさんはこの山によく来るのだが、今日は雨がはげしくなってくるし、目的地に行くには真っ暗になってしまうので戻ったほうがいいよ」と語りかけると「僕たちはボーイスカウトです。計画どおりに目的地に行きます」というしっかりした返事が帰ってきた。

「君たちはこの山に登ったことがあるか」と聞くと、「始めてです」では「君たちの隊長はこの山とコースをよく知っているのか」と問い直すと、「隊長はこの山に来たことはありません。いつも車できてくれますが、山には登りません」という返事であった。このスカウトの正直な返事に、驚きとともに一般の世相に指導者も影響されてきたのかといささか割り切れない気持になってしまった。共に目的に向かって汗を流し、苦しみ、耐え、乗り越えて行こうという気迫と基本的考え方が薄れて行く昨今であるだけにボーイスカウトの指導者だけは自らやる人であってほしいと思い、山でのこの些細(ささい)な出来事に、野外活動を訓練の場とするボーイスカウトの指導者は、まず自分で体験し、自分でやってみる人であってほしいとつくづく考えさせられた。どうかみなさん、率先して自らやる指導者になってください。

1982年9月号

## B-Pの心に学ぶもの

### 小島 孝惇

私は、ボーイスカウト運動を生涯の道として選んだことに限りない歓びと、この運動に、私を導いてくださった、諸先輩の方々に對して感謝の心でいっぱいです。

私が、この運動に志した最大の理由は、内面（精神）と外面（健康・技能）の両立を謳（うた）った運動であったからです。

たとえば、他に対する親切（奉仕）にしても、それを自分が他に『してあげる』だけでは奉仕の外面にすぎませんが、これに他から奉仕の機会を『与えていただいた』という、つつましい精神（内面）をとともなうところにこの運動の素晴しさがあるのだと思います。

今日、世は自由という名の我がままや得手勝手が往行して、『言うより聞き手になる』というようなつつましさが失われつつあるなかで、スカウトこそこのつつましさを実践しているのだと信じています。

“B-Pの心に還れ”とはよく耳にする言葉ですが、この“還れ”とはどこを指しているのでしょうか。

私には、人としての内面と外面との調和のとれた実践力のある青少年を育てよ。ということのように思われます。

スカウティングとは、“自らに問う心（智慧）”を忘れることなく、諸事に対処して挫（くじ）けることなく勇断をもって新しい道を開拓して生きる力であると思います。

省みて、現今の青少年の実態にふれるとき、内面と外面の両面の内、殊に内面の充実を叫ばずにはられません。

かつて、故村山 有先生ほかの先輩の提唱によって「宗教章」の制度が発足しましたが、それは宗教章に表わされる信仰を通じて、スカウトの内面充実を願われたものにはかなりません。信仰は、人知、人力をこえた偉大なもの（神・仏）への敬仰であり、その根幹をなすのは「つつましい心」であるともいえましょう。

その後、20年余の歳月を経た現在、先輩のあとをうけた私たちが、このような心をどのようにスカウトの血となし、肉となしえているかを思うとき、忸怩（じくじ）たるものを感じている次第です。

現在および明日に向ってのスカウティングの課題の一つが、ここにあるように思います。

1983年8月号



継続は 力なり

人間は  
その短所による失敗よりも  
長所による失敗のほうが  
はるかに多く そして深い  
日々 己を知る為の  
努力が足りないからだ

# 鏡を大切に

今津道子

那須の野営場に行くと、コースの入口に鏡があります。実修所に入所したとき初めて知りました。そのときは、何か野営場には不つり合いに見えました。

いよいよコースが始まるとき、私はこの鏡に向かい自問自答しました。「身なりはよいか。人所の心構えはゆるぎないか。」それは大変な緊張感でしたから、そうしないではいられませんでした。

さてコースが始まると、忙しいこと忙しいこと。

ネッカチーフが曲ったり、ベレー帽に枯れ草を乗せたり、自分で気付く暇ありません。その都度、仲間が教えてくれて、直してくれたものです。

後になって、自分なりにあの鏡の存在には意義があることを悟りました。

野外活動中は鏡がありません。その代りに仲間という鏡があります。行動や服装の乱れは申すまでもなく、愛する道の友ならば更に深く、お互いの理解、心構えの過ちも写し合い、正し合い、成長し合うことのできる、すばらしい鏡です。

この習慣が、スカウティングの正しい発展を支えて行くと思いました。

しかし悲しいことに、年功を重ね、箔が付いてくると、互いの遠慮から忠告を敬遠するようになります。そうなりとお互いの鏡はまぶしくて反射しあうのでしょうか。

よく批判を受けるのは、自分の姿が見えなくなって、うっかりスカウティングの上にあぐらをかく私たちの姿が、社会一般の人という鏡には、掛値なく写るからではないでしょうか。

その点、現場のリーダーは幸せです。何でも恐いほど写し出すスカウトという卒直な鏡を持っているからです。どうぞ、その鏡を宝として大切にしてください。

1984年5月号

人を大切に  
物を大切に  
時間を大切に  
事がらを大切に

あなたの ランプの灯を  
もう少し 高く 掲げてください  
目の見えない人の為に  
(ヘレンケラー)

人は だれでも  
夕日を 美しいと思うことは 出来る  
でも  
夕日という文字を知っている人は  
もっと 美しいと思うことが出来る  
絵や写真や詩や音楽で  
表すことの出来る人は  
もっと 美しいと思うことが出来る  
信仰心のある人の みる夕日は  
どんなに 素晴らしいだろうか



# より広い視野をもとう

山内 典博

小学校の校舎建築中のことである。児童のための「鏡」がとり付けられたが、工事の担当者は、自分の目の高さで位置をきめてとり付けてしまった。

鏡を利用する児童の「高さ」を考えずに、自分の尺度や感覚で工事がなされたわけである。（その後、事情を説明し、快く改良工事がなされ、鏡の位置がさげられた。）

スカウト運動の指導者として、このような「自分のやることだけが……」という独善的——ひとりよがりの考え方で行動してはいないだろうか。指導者講習会、ウッドバッジ研修所、同実修所と自己研修をかさねていくなかで、「これだけ知っているから……」「こんなに経験をつんだのだから……」という考え方で、自己満足におちいってはいないだろうか。

スカウトに接し、奉仕できるよろこびをもつ成人指導者は、つねに謙虚に自己をみつめ、より深い研修を続ける姿勢をもちたいものである。

おとなの考え方——自分だけの尺度で少年たちに接してはいないだろうか。自分だけが子どもを理解していると「ひとりよがり」になってはいけない。

B-Pのことばに「私の目前にある山は、『もっと広く見よ、もっと遠くを見よ、そうすれば道が見いだせる——』と、私に告げている」とある。



この広い視野——識見をもつためには、研修を続けるほかはない。研修を続けることこそ指導者たる第一要件である。ひとりで——多くのなかまと協同で——そして、体得すること——汗をながし、自然のなかで、自分自身をみがき続け、この道への奉仕を続けたいものである。

1984年9月号



## 四つの信頼

少年を信じよう  
スカウティングを信じよう  
自分自身を信じよう  
神（仏）を信じよう

## 孔子ノ言葉

之ヲ知ル者ハ 之ヲ好ム者ニ如カズ  
之ヲ好ム者ハ 之ヲ楽シム者ニ如カズ

（スカウティングヲ知ル者ハスカウティングヲ楽シム者  
ニハカワナイ）

# 「自然に学びたい」

簡井 照夫

地震、雷、火事のつぎ、親父の座がゆらいだといわれて久しい。親父に限らずかつて權威のあったことくもの>が、価値観の変動から權威を失いつつある。スカウトの指導者も、またそうではないだろうか。社会の変化、スカウトのニーズに合わすといいつつ実は押し流されていることはないだろうか。

私は学生時代、滑空部に所属し、プライマリー機で練習した。14回ゴム索を引張り、17回目によりやく1回空を飛べた喜びを味わったことがある。飛行機よりもグライダーが好き、スケートよりスキーが好きである。より自然を理解し、自然に逆らわず、順応して与えられた条件を克服する喜びは格別大きなものがあるからである。

自然は大いなる牧場といわれている。親や權威には反発し、なかには逃避することも可能であり、オロオロした親から自由をバイクを車をせしめ、家を出て面白さのみの仲間と奔放な生活をする……

自然に対してはどうであろうか。自然をなめて刃向かえばけがをするのがオチであり、すべての自然の節理から逃避すれば死があるのみである。スキーも登山もサーフィンも、車の運転でさえ面白いからといって慣性や摩擦という自然の法則を無視すればその結果は明らかである。自然の強大さを知り、そして偉大なるものへの信仰の心を芽生えさせることが、今の子供に最も必要なことではないだろうか。

ここに、自然を友とし自然に学ぶスカウティングの最大の利点がある。

あとはただ我々大人が、指導者が、子供に、スカウトにいかにして仕向けるかである。

スカウティングの根本はどうであったか。いかなる手法が最良であるのか。環境に押し流されていないだろうか。自分自身思い上がったところはないか。こびへつらっている点はないであろうか。口先きだけになっていないだろうか。

今一度、勉強し直さなければと思っているのが昨今の私である。

1985年7月号

原因は同じでも 結果は同じではない  
結果の無事に慣れるな

VSOPで いこう

(プラダエーの はし でない)

|   |          |     |
|---|----------|-----|
| V | バイタリティー  | 活力性 |
| S | スペシャリティー | 専門性 |
| O | オリジナリティー | 独創性 |
| P | パーソナリティー | 個性  |

孔子ノ言葉

徳 孤ナラズ 必ズ 鄰アリ

(スカウティングハ 弧高的 ナ モデルナイ)

## 第一回ニッポンジャンボリーで 出会った少年

吉川英治氏（作家）

『奥の南軽井沢に、先頃から、日本ジャンボリーの大キャンプ群が展開されていた。迎えに来た香屋子の印象のもと、もう日暮れだったが、車をとばして行ってみた。』

山並に囲まれた高原の段丘に、世界14か国のボーイスカウトの色とりどりの団旗、ことに日本の吹流しの幟なども、夕空の大浅間を正面に、色彩映画の中世の騎士陣でも見るようにきれいだった。

新聞を見ていると「太陽族」「愚連隊」とか、とにかく暴力という活字が紙面に見えない日はない。どうして、世間は、少数なものを、大多数の如く錯覚させるのだろう。戸塚文子氏が、なにかの紙上で「ついに、太陽の子ということばも、私たちには、汚れを感じさせてしまった。」と嘆いていたが同感である。

だが、本当の「太陽の子」は、やはり健康な若さを、ジャンボリーの無数の天幕に、野の花のように咲かせていた。一少年に、道をたずねる。じつに親切、かつ明晰で、愛らしい。天幕の中では彼らはねぐらの支度やら晩さんの用意に愉しげだった。

米・フィリピン・ドイツ・ポルトガ

ル・ベルギー・スイスなどの遠く来ている少年たちのうちに、どこの国かただ一人で一国を代表してきた少年もいるとう。

新聞記者が、その独りぼっちの少年にむかって「淋しくない？お友達は出来た？」と訊ねたら、その少年は、高原の無の天幕を指して、「ちっとも淋しくない友達は、こんなにいるから」と、答えたそう。

これは、翌朝の紙面に見えた小記事である。その朝、何となく、朝飯まで美味かった。』

★第一回日本ジャンボリー 於 軽井沢  
昭和31年8月3～7日

★この一文は、同年9月2日の「週刊朝日」に連載中の「新・平家物語」の筆間余録である

★大阪連盟弘報「やまひこ」（昭和31年10月11日）巻頭言の一部として、使用されたものから転載した



指導してくれる人は必ずしも  
容易にみつかるとは限らない

## 青春の詩

サムエル ウルマン

青春とは 人生のある時期ではなく、  
心の持ち方をいう。

バラの面ざし、紅の唇、しなやかな手足ではなく、  
たくましい意志、豊かな想像力、燃える情熱をさす。  
青春とは 人生の深い泉の清新さをいう。

青春とは 臆病さを退ける勇気、  
安易に流れる気持ちを ふりすてる冒険心を意味する。  
時には 二十歳の青年よりも 六十歳の人に青春がある。  
年を重ねただけで 人は老いない。  
理想を失うとき 初めて老いる。

歳月は皮膚にしわを増すが、情熱を失えば心はしぼむ。  
苦悩・恐怖・失望により、気力は地に這い 精神は芥になる。

六十歳であろうと 十六歳であろうと人の胸には、  
驚異に魅かれる心、幼子のような未知への探究心、  
人生への興味の歓喜がある。  
君にも吾にも 見えざる心の繋がりがある。  
人から神から 美・希望・欲び・勇気・力の  
靈感を受ける限り 君は若い。

靈感が絶え、精神が皮肉の雪に被われ、  
悲嘆の氷にとざされるとき、  
二十歳であろうと 人は老いる。  
頭を高く上げ、希望の波をとらえる限り、  
八十歳であろうと 人は青春にして已む。

## 『お わ り に』

古人の跡を求めず

古人の求めたものを 求めよ

「スカウティング」誌（昭和33年～平成元年）の巻頭言から、選ばせて戴いた原稿を、まとめてみました。

先ず、始めにお断りとお詫びを申しあげます。

著者の方のご了解を得ず、掲載させて戴きました。後に続く後輩の為になにとぞ お許しください。

ここに掲載できなかった原稿も皆素晴らしいものばかりですが、次のような理由で割愛させて戴きました。

同一の方のものは一点にさせて戴きました。（中村 知先生を除き）

その時の話題性に富んだもの（新年の挨拶・BP祭のメッセージ・諸行事・自然現象・社会的事象など）、時代的背景（社会情勢・ボーイスカウトにおける教育制度など）が異なり、若い指導者達には理解できにくいものなどは、別の機会に譲ります。

特に、若い指導者達の意見・感想を大切にし、選ばして戴きました。

紙数の都合とはいえ、なにとぞご容赦くださいますよう、お願い申しあげます。

『スカウティングの原点を探る  
シリーズ 編集グループ』

## 「編集グループ」

### ◎ 大阪スカウトクラブ

|       |       |
|-------|-------|
| 田村 博治 | 奥 壽良  |
| 加茂田 甲 | 高島 忠男 |
| 佐藤 茂弘 | 佐多 治美 |
| 山田 康正 | 後藤 森一 |
| 武田 慶一 | 市口正太郎 |
| 二階堂泰規 | 石橋 善晴 |
| 青木 栄治 | 曾根 輝夫 |
| 太田 春子 | 山口 満雄 |
| 成瀬堅太郎 |       |

#### ☆ ワープロ編集

高森 茂 今井 清水

### ◎ 大阪連盟資料センター

|                                       |       |
|---------------------------------------|-------|
| 義村 隆                                  | 宮本 智喜 |
| 吉井 義隆                                 | 藤淵 和代 |
| 窪井 文子                                 | 小倉 匡平 |
| （高島・佐多・山田 後藤<br>石橋・青木・曾根・太田<br>山口・今井） |       |

（ ）は大阪スカウトクラブ と重複  
☆ヤングチーム

|       |       |
|-------|-------|
| 足立 雅也 | 松村 満夫 |
| 中田 延明 | 飯岡 正敏 |

大阪府中央区者の宮中央2-13-33  
日本ボーイスカウト大阪連盟気付  
大阪スカウトクラブ